

---

# 化け物学園帝国

静寂夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

化け物学園帝国

### 【コード】

N9389V

### 【作者名】

静寂夜

### 【あらすじ】

化け物ばかりが集まる、学園。人間は恐れていて誰も近寄ろうとしない。

そんなに悪い化け物達じゃない、学園。

それがこの化け物学園帝国！

絆と友情そして時には恋愛溢れるハチャメチャストーリーが始まる！

## 登場人物 1

緋鬼瘤 ひきりゅう 雨眞魏 あまね

15歳で死神とヴァンパイアの血を引く女の子。

二重人格。

普通⇨明るくて元気で優しく心配性でよく笑う。

変化⇨生意気で暗くて口が悪くて冷たくて笑わない。

自分は人間だと思っっているらしい。

人格が変わると『瞬慧』という女の子になる。

幸杜 ゆきもり 梓 あすな

15歳で狼と天使の血を引く男の子。

生意気で優しく照れ屋でちよつとキツイ時もある。

雨眞魏の幼馴染で二重人格モードの雨眞魏の世話をしている。

いつも苦労している。人の記憶を喰う事が出来る。

青柳 あおやなぎ 黒 くろ

15歳の悪魔とヴァンパイアの血を引く男の子。

生意気で口が悪いけど本当は優しい。

白の双子の兄。白と血は繋がっていないが双子。

雨眞魏を気に入っている。

青柳 あおやなぎ 白 しろ

15歳の天使とヴァンパイアの血を引く男の子。

明るくて元気で優しく甘えん坊。

黒の双子の弟。黒と血は繋がっていないが双子。

雨眞魏にいつも甘える。結構嫉妬深い。

紀来 きらい 漣 みづ

14歳の極普通な人間の女の子。

真面目でしっかり者の優等生。

化け物ばかりの学園の唯一の人間。

両親の都合でこの学園に無理矢理転校させられた。

西院等 由梨

17歳の狐の血を引く女の子。

表は元気で明るい、裏は弱虫で怖がり。

人間紀来。

嘉応 劉禰

15歳の狼とヴァンパイアの血を引く女の子。

体は意外と弱く見た目は狼だが、体質はヴァンパイアで日光が嫌いでしょつちゆう風邪を引く。

人間があんまり好きではない。

鈴月 乃亜

12歳の九尾（狐）の血を引く女の子。

明るくて元気。

火が苦手。

鈴峰 凌

15歳（精神年齢、外見年齢）竜人（純血）の血を引く男の子。

明るくてキツイ言い方をしてしまうが、根は優しく思いやりがあり強い子。

澪が幼い頃に初めて会った人間意外の人型の生物。

人が簡単に入れないような山の中で暮らしている。

運動がよく、身軽。

## 登場人物2

闇該 やみがい 龍牙 りゅうが

16歳の狸の血を引いた男の子。

不良だけど優しく強いです。

由梨と幼馴染。

黒崎 くろさき 蒼弥 そうや

17歳（精神年齢・叔父さんなみ）ヴァンパイアと人間の血を引く男の子。

クールで冷静？な極普通の常識人。

素直じゃない上に人見知り、微妙にツンデレでたまに毒舌。

困ってる人は見逃がせないらしい。

超がつく甘党で血を食さない所が苦手。（見るとぶっ倒れる。）

日光が苦手で常に日傘を持ち歩いている。

鬼塚 おにづか 緋那 ひな

18歳の鬼の血を引く女の子。

DSで明るい。

家事が得意。

身体能力がよく馬鹿力持ち。

黒蝶 あげは 凜 りん

年齢不明で閻族とヴァンパイア（うさぎ族）の血を引く女の子。

冷静でクールで人見知りだが、心を開く一面もあり。

連と血が繋がっていない双子。

頭の回転がよく、頭がいい。

人殺しを昔していて、何万人の人々を殺してきた。

コードネーム、『漆黒の蝶』『血に染まった少女』など言われてい

る。

顔つきに無表情だが、実際に感情を抑えている。

黒蝶あげほ連れん

年齢不明で闇族とヴァンパイア（うさぎ族）の血を引く男の子。明るくて優しくて頼りになる。凜の双子となつ存在。

刹那せつな吹雪ふぶき

見た目は10歳で妖怪雪女に血を引く女の子。無関心。

一般の雪女、雪男は美しい男を狙うが、吹雪は美しい女を狙う。

咲愛さきあいシルク

年齢不明で、龍リウリウの血を引く女の子  
ミステリア

魔法を使う時は、龍リウリウに変心する。

羽を隠し、目には眼帯を。

過去に酷い目にあわされて人をあんまり信じれなくなっている。意外にツンデレっぽいところも

シルク・アスタール

11歳で蛇と人間の血を引く女の子。

殺人鬼で男女（子供）問わず、関係なしに殺す。

通りすがった一般人でも殺す。人殺しの天才。

由梨の元親友。

## 1話 入学

タツタツ…。

足の音が聞こえてくる。

「…ここが私が今日から通う学校?…。」

一人の少女がつぶやいた。

「雨眞魏。」

「ん?あつ!梓!おはよう」「ニコッ

「お前、相変わらずテンション高いな。」

「そんな事ないよ」「ニコッ

少女の名前は『緋鬼瘤 雨眞魏』

「大丈夫か?」

「うん!バリバリ、大丈夫!」「ニコッ

「そっか」「ニコッ

「うん!」「ニコッ

少年の名前は『幸杜 梓』

「あの…。」

「ん?」

梓と雨眞魏に誰かが声をかけてきた。

「化け物学園はここであつてるかな?…。」

「うん!合ってるよ」「ニコッ

「良かった。」

「あつ私、緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」「ニコッ

「俺は、幸杜梓。よろしく頼む。」

「あつ、私は、嘉応劉禰よろしく…。」

「うん!」「ニコッ

三人は、学園に入つて行つた。

「誰もいないね。」

階段を上りながら言う。雨眞魏。

「そうだな。」  
梓は辺りを見渡す。  
「おかしいよね…。」  
「教室合ったよ！二人とも！」  
教室が合ったらしい。

【1 B】と書いていた。

「1 Bで合ってるのかな??」  
「入ってみるしかないだろう?」  
「それもそうね…。」  
三人は教室に入った。  
そしたら一人の女の子が席に座っていた。  
「あれ?一人だけ?」  
「一人だけだろう?見渡せば。」  
「うん…。」

座っていた、女の子が席を立ち、三人の目の前に来た。

「初めまして、私は鈴月乃亜<sup>すずつきのあ</sup>なの。」  
「私は、緋鬼瘤雨真魏。よろしくね!乃亜ちゃん」ニッコシ  
「俺は幸杜梓。よろしく頼む。」  
「私は、嘉応劉禰。よろしく…。」  
「はい、よろしくなに」ニッコシ  
四人は挨拶をして、席に座った。  
「先生来るのかなあ??」  
「こないだろう?この気配だと。」  
「そう?来ると思うけど…。」  
「教室にこない先生なんて聞いた事無いなの。」  
「それもそーだな。」

30分後

「来ないねえ」

「ZZZZ」

「梓、寝てるよね？」

「疲れ果てたんだよ。」ニッコ

「????」

ガラツ

「??」

教室に誰かが入ってきた。

「先生ですか??」

劉禰が聞いた。

「はい。」

と答えた。

「皆さん、ご入学おめでとうございます。これから。

この化け物学園帝国の掟、規則などを説明します。」

「遅れてから、そんな事言うか??」

「梓、起きたんだあ」ニッコ

「説明なの？」

「そうです！質問なども受けましょう！」

「って生徒、私達だけ!？」

劉禰が大声をあげて驚く。

「そのとおりです。」

「えっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

## 2話 説明

「この学園は全寮制です。」

先生が一言そう言う。

「先生、質問！」

劉禰が手を上げて言う。

「こんなボロボロの学園に寮なんてあるんですか??」

「ありますよ。とっても綺麗な寮が。」

「おお〜！」

皆、嬉しい顔。

「この寮は一人一部屋。1階〜3階までは男子寮。

4階〜6階までが女子寮です。」

「先生！質問したいんですけど…。」

雨真魏が言う。

「はい？」

「女子が男子寮に行ってもいいんですよね??」

「まあ〜自由です。それは男子寮、女子寮の寮長に許可を貰ってく

ださい。」

「はい！」

「寮は、お風呂も時間制になっています。」

9時〜10までが女子、11時〜12時までが男子、それ以降は

自由です。」

先生が軽く説明する。

「先生。」

「はい？」

劉禰が先生に質問する。

「何時以降は寮から出ちゃ駄目なんですか？」

「人間以外は9時以降は出ては駄目です。」

「じゃあ、私だけ駄目なんだあ〜」

「えっ？雨眞魏、人間なの？」

「うん、まあ〜ね。劉禰ちゃんたちはいいなあ〜」ニコッ

「じゃあ、先生。」

梓が質問した。

「なんですか？」

「俺達みたいに人間以外の奴とだったら出ていいのか？」

「はい。まあ〜危険がなければ。いいでしょう。」

「ヤッター！梓ありがとう！」ニコッ

「なっ!?!?…別に…。」

梓は顔を真っ赤にさせた。

恋?…面白そう。

劉禰はにやける。

「では、自習にします。授業は教科事に先生が変わります。でわ。」

先生はそのまま、教室を出て行った。

「暇だよな。こんなんだったら。」

「それもそうだよねえ〜。」

「ん〜??」

「雨眞魏は人間なのに、よくこの学園に入れたなの？」

「私もわかんないや。自由に生きてたから」ニコッ

「そうなの？」

「うん」ニコッ

ガラッ!

「ん？」

誰かが教室に入ってきた。

「すみません！遅れました!?!」

「ハア：ハア：遅れた？。」

「あれ？先生は？？」

「いないな。」

「大丈夫だよ、今自習だから」ニッコ

雨真魏が優しく言う。

「遅刻？って言っても…」

「私、紀来きらい溇みです、よろしくお願ひします！」

「俺は、涼峰すずみね凌りやうよろしく。」

「私は、緋鬼瘤雨真魏。よろしくね」ニッコ

「幸杜梓。よろしく頼む。」

「私は嘉心劉禰。よろしく。」

「私は鈴月乃亜なの。よろしくなの」ニッコ

皆自己紹介をする。

「ねえー皆で寮の確認でも行かない？？」ニッコ

雨真魏が提案する。

「いいな。それ！」

「いいと思う。雨真魏が提案したから。」

「私も賛成なの！」

「私も行きます！」

「溇が行くなら…俺も。」

「よし！じゃあ行こう！」ニッコ

こうして…始まった、戦と友情と絆と恋の物語ストーリー！。

### 3話 双子

「一人一部屋って、広すぎるようなあ……。」「  
雨眞魏は、とても寂しそうな顔をする。」

朝

「梓！おはよう」「ニコッ

「おう、雨眞魏。」

「おはよう、雨眞魏」「ニコッ

「おはよう！皆」「ニコッ

皆朝からテンションが高い。

「雨眞魏、昨日は眠れた？」

「うん、劉禰ちゃんは？」

「私もバツチリかな？」「ニコッ

「お前ら仲いいな。」

「うん！」「ニコッ

劉禰と雨眞魏はとても仲がいいらしい。

「雨眞魏！」

「えっ！？」

「！？。。。」

雨眞魏に誰かが抱きついてきた。

「何？雨眞魏！大丈夫？？」

「白、何してんだよ！」

後ろから一人の少年の声がした。

「白？。。。」

「雨眞魏、久しぶり！！！！」「ニコッ

「白、いいから雨眞魏に抱きつくな。」





#### 4話 二重人格

「雨真魏、今日は顔色悪いよ。」

白が雨真魏の顔を覗き込んで言う。

「そんな事ないよ。私はいつも元気だし！大丈夫！」ニコッ  
雨真魏は明るく接する。

「そう？ならいいよ」ニコッ

「うん！」ニコッ

「相変わらず、白は雨真魏に甘えるなあ」

「黒！僕だけが！雨真魏に甘えていいの！」

「はあ！意味分からん！」

「はいはい。喧嘩しない。」

「雨真魏も大変だね」ニコッ

「劉禰ちゃん…そんな事ないよ」ニコッ

「えっ？」

「毎日楽しいよ」ニコッ

「そっか。」

劉禰と雨真魏は顔を見合わせて微笑んだ。

「雨真魏と劉禰は何笑ってるの？」

「あつ乃亜。」

「乃亜ちゃんだ」ニコッ

階段を下りてくる乃亜。

「私も混ぜてなの」ニコッ

「うん」ニコッ

「皆さん、どうもです。」

「澪ちゃん！」ニコッ

「ってあれ？梓と凌は??」

劉禰が辺りを見渡す。

「あれ？何所行っただらう??」

澪は辺りを見渡す。

「梓も何所行ったんだろぅ?? 白と黒は知らない?」

「知らないーい!」

二人ははもって言った。さすが双子。

「!??。」

「雨真魏?どうかしたの?」

雨真魏の様子が変わった。

「雨真魏!どうしたの?」

「雨真魏!どうしたの!?」

乃亜と劉禰が雨真魏のそばに駆け寄る。

「チツ。。。」

「えっ???」

「雨真魏?。。。」

乃亜と劉禰が啞然する。

「何で俺が。。。」

バンツ!

「偉い、大歓迎されてないなあー。。。」

「雨真魏?。。。」

「本当に俺が嫌いなんだな…白。」

「白!やめろ!」

「僕、あいつ嫌い。殺していいよね?」

白は銃を構える。

「俺も準備運動にはなるだろう?」

「そんな事聞いてない!」

白が銃を撃とうとする。

「雨真魏とは違う。。。」

「誰なの?。。。」

乃亜と劉禰は焦る。

「はあ…お前ら何してんの？」

「梓？何でお前がここに居る？」

「瞬慧しゅんずい！」

「ん？」

「あんまり、こんな所で騒ぎを起すな。」

「はいはい。」

「白、落ち着け。黒、頼むわ。」

「おう。白。」

白は銃を片付けた。

「……………」

「あっち行くぞ。」

白と黒はどこかに行った。

「雨眞魏も駄目な人間になったな。」

「しょうがないんだよ。」

「そうかよ。」

「あなたは？誰？…。」

劉禰が違う雨眞魏に聞く。

「俺は、雨眞魏のもう一つの人格。名前は、瞬慧しゅんずい。」

「まあー本当の名前ではないが。」

「どついう？？」

「お前らが知る必要はない。」

「……………」

「雨眞魏はどうしてるの？？」

乃亜が恐る恐る聞く。

「今は眠っている。」

「……………」

「俺は普段あんまり出てこないんだが…雨眞魏が俺を目覚めさせた。」

「……………」

「えっ？雨眞魏が？？」

「そつだ。あいつにも何かあるのらろっ？？」

「あなたは…。」

「えっ？」

劉禰が聞く。

「瞬慧は人間なの??…。」

「違う。雨眞魏も違う。」

「えっ??…だけど雨眞魏自分で…。」

「あいつは自分自身が人間だと思い込んでいる。何も知らないんだよ。」

「!?!?。」

「もう雨眞魏おきたから、俺は行く。じゃあな。」

「あっ!待って!瞬…。」

「うわぁ!どうしたの!?劉禰!大声なんか出して!?!」

雨眞魏が元の人格に戻った。

「雨、雨、雨眞魏戻ってよかったよお」

乃亜と劉禰が雨眞魏に抱きつく。

「あわわわわわ!どうしたの??」

雨眞魏がちよっと焦る。

「はぁ…凌どこ!?!?!」

漣は凌を探し?。

## 5話 喧嘩

タツタツ…ガラッ

一人の女の子が教室に入ってきた。

「転入生？」

「…。西院等さいいんとう由梨と言います。」

「由梨ちゃんって名前なんだね。可愛い」「ニコッ

「人間？…」

「うん！そうだよ」「ニコッ

「!?!?!」

由梨は雨眞魏に威嚇をする。

「えっ？何？もしかして由梨ちゃん、人間苦手な人なのかな？？」

「えっ？…」

漣と雨眞魏は焦る。

「…。」

走って教室を出て行く。

「はあ…人間苦手な人いるんだなあ…」

「雨眞魏も気にしない。漣も。」

「うん。ありがとう」「ニコッ

「!?!?!」

雨眞魏の様子が変わった。

「まさか…瞬慧？…」

「俺は、雑魚な生き物、人間嫌いなんだよバーカ！」

「空気読めてないの…」

乃亜がしょぼんと言う。

「梓！瞬慧を止めてよ！」

劉禰が梓に狼の電波で伝える。

「俺はあんな雑魚にんげ…」

梓が瞬慧の口を塞いだ。



「雨眞魏！！！！！！！！」

「うわぁ！白！」

白が雨眞魏に抱きつく。

「白って本当に、雨眞魏が好きなんだね。」

「雨眞魏好きだよ！」ニコッ

人間に好意を抱く？…何考えているんだ？…馬鹿馬鹿しい…。

「由梨、何考えてるの？もしかして人間の事？」

「別に…。」

「何で、由梨は人間が嫌いなの？私、それが疑問に思ったわ。」

劉禰が由梨に聞く。

「誰が、あなたに言いますか。フンッ」

由梨は窓から飛び降りた。

チャリンッ…それと同時に鈴の音が鳴り響いた。

「何！その態度！ちよつと待ちなさい由梨！」

劉禰が狼の姿になって、由梨を追いかけた。

「劉禰ちゃん！由梨ちゃん！喧嘩は駄目だよ！！！！」

「劉禰！由梨！喧嘩駄目ですよ！」

乃亜と雨眞魏が注意する。

リンッ…リンッ…。

鈴の音と同時に由梨が狐の姿になって逃げる。

由梨が鎌を構えて火玉を2、3発投げる。

「何で、攻撃してくるの？」

「追いかけてくるから。」

「あっそ！」

「うわぁ！！…何あれ？」

澗と凌が廊下を歩いていると由梨と劉禰が元の姿に戻って戦っているのが見えた。

澗が窓を開ける。

「さすが、九尾と狼って感じだな。」

「ん？澗と凌見てたの？」

「ごめんなさい。気になってしまっただけ。」

「俺も。」

「そう？別に見るのは全然構わないけど。」

由梨はいつの間にか消えていた。

「……。」

「戦か？俺にも戦わせる！」

「お前は引つ込め！何で今日はいっぱい出て来るんだよ！」

「俺は…いや、今日はもういい。じゃあな。」

「なんだっただ…あれは？…。」

## 6話 転入生

「はあ〜…。」

「由梨ちゃん、どうかしたの？」

「……………」

由梨が無言で教室を出た。

「雨真魏、どうかしたの？」

「私はなんでもないけど…由梨ちゃんがため息をついていたから…」

「

「いつもの事じゃないの？」

「そうなの？」

「私、この間由梨を追ってたら、戦いになっちゃった」「ニコッ

「知ってるよ。あんまり、喧嘩とかしちゃ駄目だよ。」

雨真魏は劉禰の頭を撫でる。

劉禰が狼の姿になる。

ガラッ

「うわあ！狼！」

梓が驚きすぎて足をつった。

「梓、そんなに驚く事なのかな？？」

「って、驚きすぎて足つってるよ梓。」

「その声…劉禰かあ…痛！つるのって痛い！」

「当たり前だよ。」

「梓がへたれてるな、白。」

「うん」「ニコッ」

白と黒が梓の足をつつく。

「やめろおおおおおおおお！……………」

梓が痛さのあまり叫ぶ。

「はははは。」「ニコッ」

本当に平和な…日常だな…。

「憎しみで我を忘れ…。」ボソッ

「雨眞魏、今何か言った？」

「あつうん。何でもないよ」「ニコッ

「そう？」

「あれ？梓が白と黒にいじめられてるの。」

「足つったんだって。」

「そうなの？じゃあ私もイジメるの！」「ニコッ

「やめるおおおお。」

梓は絶望状態だった。

ガラッ

一人の少年と少年の後ろに隠れる少女が教室に入ってきた。

「…。」

「凜、そんなに黙ってる誰とも喋れないよ」

「転入生？」

「この頃、転入生多いよね。」

「それ思った。」

漣と凌が二人で話していた。

「えっと…黒蝶連あけはれんよろしく！」「ニコッ

「…。」

ガラッ

「えっ??？」

漣と凜の後ろから少年が入ってきた。

「何か、今日で随分転入生増えたよね。」

「転入生じゃなくて、本当は登校が今日だったりしてなの」「ニコッ

「そうなのかな??？」

劉禰が結構考える。

「初めまして、私は緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」「ニコッ

雨眞魏は優しく微笑みかける。

「私は、嘉応劉禰。よろしく。」

「私は乃亜。よろしくなの!」ニコッ

「この学園はヴァンパイアが多いのか?」ボソッ

「だな!」

「うるさい…。」ボソッ

「凜、気分でも悪いの?」

「……。」

「ごめん。人見知りで。」

連が劉禰に軽く謝る。

「梓! つつたの治った??」

「治った! 白! 黒! お前ら許さん!」

梓は黒と白を追いかけた。

「あれは?」

連が梓と黒と白を見る。

「あれは、気にしなくてもいいよ」ニコッ

「そっか。」ニコッ

「??」

「……。」

「で、あなたの名前は?」

雨眞魏が蒼弥に話かける。

「えっ?…俺は、黒崎蒼弥。」

「うん。よろしくね! もう覚えた」ニコッ

「……。」

チャリンッ…鈴の音がした。

「うわあ!??」

連が驚く。

由梨が連の隣にいた。

「…。」

凜がなぜか由梨の方を見る。

「由梨、この間はごめんね…ちょっとムキになっちゃって…。」

劉禰が由梨に謝る。

「二人喧嘩したの??」

「連、口をはさむな。」

「あっ!うん…。」

「別に…気にしてない…。」

「そっか!」

劉禰は安心する。

「雨真魏!」

「うわぁ!?!白!何??」

「梓が追いかけてくるよ。」

「えっ?」

白が雨真魏に抱きつく。

「蒼弥、どうかしたの?」

「いや…。」

「??」

「梓!いい加減にしてあげてよ!黒が可哀想だから!」

「はぁ…!本当になってうわぁ!何か人数増えてるし!」

梓は驚く。

パリンッ!

窓ガラスが割れる。

「敵…。」

由梨が反応する。

「少し離れてるけど…確かに居る…。」

窓から飛ぼうとしている。

「由梨待って!」

「俺が行ってやるのか？」

「戦いか？…なら俺が殺してきてやるっ。」

「げげえ！瞬慧！？」

「……。」

## 7話 敵か？味方か？

「じゃあ、俺行つて来る。」

蒼弥が教室から出ようとするとする。

「私も行く。」

由梨は蒼弥についていこうとする。

「駄目！全員ここで待機！」

劉禰が皆に言う。

「俺は行く！お前、邪魔をするな！」

「瞬慧はうるさい！」

「チツ。。。」

瞬慧は軽い舌打ちをする。

「。。。」

由梨が窓から外に出る。

「ごっめんねー」ニッコツ

由梨に続いて緋那も窓から外に出る。

「おい！ちよつと待て！！白！黒！外に行け！」

「アイアイサー！」

「了解！」

黒と白が窓から外に出る。

タツタツタツ！シュンツ！タツ！

攻撃してくる相手に由梨は軽くよけ着地する。

「これは酷いわねー」

森に隠れて観察している緋那。

「殺す。。。」

敵が由梨に近づき襲い掛かって来る。

「遅い。。。」

由梨が敵の後ろに回り、回し蹴りをする。

「蒼弥！由梨達の所に行くよ！」

「おう…。」

劉禰と蒼弥が由梨達の所に行った。

「どうして、お前は行かない？」

「俺は…。」

「俺は、ここにいる。」

「瞬慧？。」

「俺は、ちよつと寝る。」

「瞬…。」

バタンッ

雨真魏はぐつすりを眠っていた。

「何？この状況！」

「あれが、ここに侵入って所だよー」

「えっ！マジで！？」

「ニッ」

敵が劉禰達に火玉を何発も打つ。

「ああー僕、楽しい事大好きなんだよねえー！」

バンッバンッ！

白は銃を出して、火玉を撃つ。

「はあ…俺、こういうの嫌いなんだよな。」

「じゃあ、僕に任せとけば？」

「それもそうだな。」

「その代わり、ご褒美だよ」「ニッ」

「はあ…お前な。いいや。俺はゆっくりしてるわ。」

「ちよっ！白いの！？」

「黒の分まで僕が働くよ！」

黒はゆっくりとのんびり、ジュースを飲んでいた。

「乃亜、漣、凌ちよっと雨真魏を見ててくれるか？」

「うん、いいよなの」「ニコッ

「うん！」

「了解。」

「頼んだ！」

梓は由梨達の所に行く。

「……。」

敵が由梨の腹を斬る。

「!?!?……。」

だが、由梨には効いてないらしい。

「???…あれ？女の人が歩いてるう〜」

白が後ろを向いて言う。

「白！前！」

「…ん？」

「お前、よそ見すんなよ。」

黒が火玉を剣で真つ二つにした。

「ここ…どこ?…。」

「そうだ、由梨！大丈夫!？」

「平気……。」

「!?!?…緋那…足。」

蒼弥が緋那の足元を見る。

「あつー…ごめん、踏んづけちゃった」「ニコッ

緋那は思いつきり敵を踏みつける。

「お前、鬼だな。」

「私は鬼だもん。」

「……。」

劉禰が敵を押さえつける。

「こつち…。」

敵が木の上に居た。

「それは幻覚…。」

「なっ！幻覚にやられたの!？」

劉禰が落ち込む。

「あらら、引つかかっちゃった。それじゃあ選択肢は殺すでしょう？」

「…。」

笑顔で凄い事を言う緋那。

「…？何をやっているんだろう?」

「僕と遊ぼうよ!」ニッコツ

白は少女に話かける。

「幻覚合格：度胸合格：攻撃不合格!」

敵の腹を思いつき蹴る由梨。

「ガッ!…。」

「俺も暇だなあ…。」

「同感だ。俺も休むか。」

蒼弥は紅茶を飲む。

蒼弥の隣でジュースを飲む黒。

「あんだ、名前は?」

白が少女に名前を聞く。

「刹那吹雪。」

「僕は青柳白。」

「よ、よろしく…。」

吹雪とちよつとだけ仲良くなった白。

あれからちよつと、戦いは続いた。

だが、由梨と敵以外は皆のんびりしていたそうです。

**8話【番外編】モテモテ魔法！？（前書き）**

はい！番外編です！ちょっと早いかなとも思いましたが、いいでしょうとww

今回は【梓】をメインにした物語です！  
お楽しみくださいね^^



「まさか、あの香水本物かよ！」

「雨真魏！私の方が梓を愛しているわよ！」

「はあ？！劉禰まで何言つてんだよ！？」

「劉禰と雨真魏より私の方が梓の事を大好きですよ！」

「乃亜まで！？」

「私も…梓の事好きだし。」

「はあ？！」

順々に、梓に告白する女子連中。

「この魔法！いつになったら切れる！？」

「知らないいー」

「はあ！？白テメエ！」

「フンツ」

白はすねていた。

「…好き…。」

「うっさいわ！ババア×ガギツ！」

「……誰がババア！ガキツだ！」

「何の喧嘩だよ。って何瞬慧までも効いてる！？」

女子、皆が梓に抱きつく。

「助けるおおおおおおお！！！！！！！！」

梓が助けを求めるが、誰も助けようとしなない。

それから数分後、梓は女子から逃げ続けたらしい。

魔法の効果もきれ、みんな元に戻ったそうだ。

**8話【番外編】モテモテ魔法！？（後書き）**

次回は本編に戻ります！



## 9話 楽しい事

「つまらないなあ〜」。

椅子に座って、窓から空を見上げる白。

「つまらないんだったら、何かして遊べばいいだろうっ?」

「じゃあ、蒼弥が僕と遊んでよ!」ニッコッ

「何をして?」

「何でもいいよ!」ニッコッ

「それが一番困るんだが〜」

「じゃあ、殺さない程度で戦ったらどうだ?」

黒が横から、蒼弥と白の会話に口を挟んできた。

「それいいね!蒼弥!それにしよう!」ニッコッ

「分かった。」

「じゃあ始め!」

「よっし!行くよ!」

白は銃を出して連発で撃つ。

「〜。」

それはかわす、蒼弥。

「ん?何してるんだ?」

「梓と雨眞魏!」

「喧嘩か?」

「違う。遊んでるんだ」ニッコッ

「ふ〜ん〜。」

黒と梓と雨眞魏が見学していた。

「雨眞魏が見てるから!僕は負けないよ!」

「俺は勝つ。それだけだろう。」

蒼弥は白は投げ飛ばした。

「とっ…。」

「もうちよつと強く投げればよかったか？」

「いいや、結構効いてたよ、だけど僕には勝てないよ！」  
銃を連発で撃つ。

一発が蒼弥の腕にかすり血が出る。

「痛ッ！」

「ヒット！」

白の銃弾は特殊な弾でかすっただけでも血が出る弾。

「行くよ！」

蒼弥に近づくと白。

「甘い。」

白の腹を思いつきり蹴る蒼弥。

「ガハッ！」

壁まで吹き飛ばされた。

「痛ッ…。」

「俺も今、結構ヤバかったな。」

「そうには見えなかったけど…楽しいよ。」

「若いつていいな。」

「何言ってるんだよ！」

白が蒼弥の頭を銃で殴る。

「痛ッ！」

「僕を甘く見ないでね！」

「俺も甘く見るなよ。」

「えっ？」

バシッッ！

「!?!?。」

蒼弥の杖で白の銃が地面に落とされた。

「チッ！」

白は後ろから銃を出す。

そして連発で撃つ。

「さっきのは焦ったよ」「ニコッ

「焦ったようには見えなかったが…。」

蒼弥と白の顔は笑っていた。

「じゃあもう決着つけよう」「ニコッ

「いいだろう。」

蒼弥が白に近づく。

「ニコッ

白が後ろから、何かを出そうとする…。」

カキンッ！パシッ！

「ストップだ！やめろ！」

黒が二人をなぜか止めた。

「白、それを直せ。」

「はいはい…！？…ゲホッ！」

「白！？」

白が血を吐いた。

「ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！…。」

「白！」

黒がポケットから薬を出した。

「飲め。」

「うう…治まった…はあ…。」

「大丈夫か？」

「うん。ありがとう」「ニコッ

「白！大丈夫？って二人ともボロボロじゃない！」

白と蒼弥はボロボロだった。

怪我也いっぱいしていた。

「手当てするから、こっちきて。」

「俺はいい。」

パシッ

梓が蒼弥の手をつかむ。

「駄目だ。ほら来い。」

「白、手当てできたね。」

「雨真魏はいいにおいがするー!」ニッコッ

「白?」。

「Zzzzz」

「Zzzzz」

黒と白は眠ってしまった。

「蒼弥：頭を怪我したんだね。大丈夫?」

「うん。」

「あんまり無茶は駄目だよ」ニッコッ

「ふわぁー…俺も眠くなった…寝るわ。お休み。」

梓は木の上で眠った。

「蒼弥は寝ないの?」

「俺は…いい。」

蒼弥はどこかに行った。

「???」。

「あれ?三人寝てる!寝顔可愛い〜」ニッコッ

「私も眠くなってきたの。」

なぜか、皆眠ってしまったらしい。

## 10話 目覚め 前編

「皆寝てるの…雨眞魏は寝ないの？」

「うん。あんまり眠たくないから」「ニコッ

「どうかしたの??皆寝て。」

「楽しい事をして、疲れたんだよ」「ニコッ

「楽しい事って??」

「さあ…。」「ニコッ

「私も寝よう。」

「私もなの!」

乃亜と劉禰も寝始めた。

「…?!…。」

「あれ?雨眞魏さん、起きてたのですか？」

シルクが後ろから雨眞魏に声をかける。

「うん。ちよつとみんなの事お願い」「ニコッ

雨眞魏はどこかに行った。

「ん?あれ?皆まだ寝てたの？」

「あつはい…。」

タツ…タツ…。

「…。」

「雨眞魏は？」

「一人でどこかに行きました。」

「ん?雨眞魏は?どこなの？」

「一人でどこか行ったらしいよ。」

「雨眞魏が一人で?珍しい事もありますの。」

「それもそうね。」

「ん？…。」

梓がおきた。

「あっ…梓、雨真魏が一人で…！？…。」

「……………」

「劉禰？」

「えっ？乃亜？…。」

「どうかしたの？」

「あっ…いや…。」

一瞬…梓じゃなかった…気配が違った…。

「あれ？雨真魏は？」

「一人でどこかに行ったの。」

「探してくる。」

「はいなの！」「ニコッ」

「梓……………ごめんね…。」

「！？………………雨真魏？…いや、気のせいか…。」

梓は雨真魏を探していた。

「雨真魏…誰かにとりつかれてる…。」

「えっ！？？」

「早く…探さないと…危険だよ。」

白が言う。

「私、探してくる！」

劉禰が狼の姿になる。

「私も行くですの！」

「俺達も行くぞ！」

「うん。」

皆雨眞魏を探す。

タツ！

「雨眞魏！」

梓が雨眞魏を見つけた。

雨眞魏に手を伸ばそうとするが、誰かに弾き飛ばされる。

「ごめんね……。」

「雨眞魏！」

「梓！」

「梓！雨眞魏！」

劉禰と乃亜が梓と合流する。

「誰だ！」

劉禰が威嚇をする。

「雨眞魏！」

「梓、元気にしてたかしら？」ニコッ

「彩歌！？」

雨眞魏の後ろから女の人が出てきた。

「誰？」

「彩歌、さつさとやる事やるわよ。」

「はいはい、本当にお節介ね。」

「雨眞魏を返して！」

「それは駄目。この子は殺す。」

瞬慧…起きる。

「!?!?。」

「な、何?」

「もしかして、瞬慧!?!?」

「俺をこう言う状況で呼ぶか?」

「別に、お前強いし。」

「なっ!?!? まあ、いい。俺は暴れるいいな。」

「ああ!?!? 好きにしろ。」

「合点。」

瞬慧は氷の刃を構えた。

「さあ! 俺と遊ぼうぜ!」

「なっ! 早ッ!?!?。」

一瞬にして、瞬慧は彩歌の目の前に来た。

「ヤバイ! 刃!」

カキンッ!

「へえ! 言霊かあ!?!? 珍しいな。」

「チッ!」

何? この殺気!?!? さっきはこんな殺気!?!?。

「よそ見すんな!」

「!?!?。」

彩歌の手に刃がかすった。

「お前狼!?!? 剣すら持っていないんでしょ?」

「だからって何!?!? 私はただの狼じゃない!」

風菜が劉禰に剣を振りかざす。

「!?!?。」

劉禰が風菜の腕に噛み付く。

「なっ!?!?。」

「これで!?!? 終わりだな。」

瞬慧がとどめを刺そうとする。

「ハア…ハア…。」

「死…!?!?…。」

瞬慧は大量の血を吐いた。

「瞬慧…!!…!!…!!」

## 11話 目覚め 後編

「瞬替！どうしたの！？」

乃亜が叫ぶ。

「瞬替！」

「よそ見したら、死ぬわよ。」

風菜の剣を横腹にかする。

「劉禰！」

「…うう…このくら…ゲホッ！」

「へえ…ヴァンパイアなのに血が拒絶かしら？」

「雨真魏…逃げちゃ…駄目だよ。」

瞬替が倒れる。

「瞬替！」

「これでとどめ！…。」

彩歌が剣を刺そうとした…。

その瞬間

パシッ

「なっ！？」

刃を受け止める雨真魏。

「そうだったね…私忘れちゃってたよ。」

「雨真魏？…。」

「私は…負けないよ…。」

氷の刃が闇と血の刃に変化。

「うう…私は大丈夫…。」

劉禰の傷が広がる。

「ヴァンパイアでも治せない傷はあるわよ。」

「雨真魏…。その刃は…。」

グサツ！

「!?!?。」

「お前…何してるの?。」

雨真魏が刃を風菜の背中目掛けて投げた。

「なんて…殺気…。」

雨真魏からはとてつもなく凄い殺気を放っている。

「許さない…。」

「雨真魏…。」

「邪魔をするな!…。」

風菜が雨真魏に剣を振りかざす。

「雨真魏!危ない!」

「雨真魏!」

パシツ

雨真魏は剣を手で受け止めた。

ポタツ…ポタツ…。

受け止めた手からは血が出てくる。

「お前…誰に手を上げているのか…分かっているのか?」

「あれは…妖力…ヴァンパイアと死神の妖力じゃ悪魔だっではがた  
たない。」

雨真魏は剣を粉々にする。

「お前!あからさまにさっきと殺気が違う!

何者だ!?!」

「…。」

剣を投げる。

「瞬慧…。」

「…雨真魏は、死神とヴァンパイアの血を引く娘だ。」

「瞬慧？」

「雨真魏は普通の死神とヴァンパイアの血を引く者じゃない。」  
「普通じゃない？どういう…。」

「母親も父親も人間じゃない。むしろ人間との関わりもない。  
母親は最強と言われた死神。父親は人を殺した証のヴァンパイア  
族だ。」

「ヴァンパイア族は知っているわ。それなら雨真魏の妖力も正しい  
と言える。」

劉禰が納得した。

バキューンッ！

「いい加減さ、その魔力を止めてくれないかな？」

「白！」

今がチャンス！

劉禰は風菜の足に噛み付いた。

「僕ちよつと、今凄く起こってるんだよね？殺していい？」

「瞬慧、お前は休め。」

「チッ…借り1だ。」

「フンッ…。」

バタンッ

「雨真魏！」

「雨真魏！大丈夫？！」

「…………。」

「風菜！お待ちなさい！」

彩歌、風菜は闇の中に消えた。

「ZZZZ。」

雨真魏は眠っていた。

「傷が再生していく…かなり早いペースで…これがヴァンパイア族…。」

「はあ〜もう傷治るのに一ヶ月も掛かるのに！！！！！！」  
劉禰が倒れる。

「劉禰！大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」ニコッ

「だけど、さっきは人は治らないって言ってなかったの？」

「あれはすぐ治るって意味。一ヶ月は掛かるけど治るよ」ニコッ

「やはり…ですか。」

「えっ？」

一人の人形を持った少女と少女の隣に居る人型ロボット？がつぶやいた。

「!?!?。」

「私が探していた罪人がここに居ますね。」

緋鬼劉雨真魏、あなたを処刑します！」

## 12話 情報×仕切り役

「雨眞魏が処刑!？」

「……。」

「死神とヴァンパイアの血を引く娘。」

「私はあなたを殺します。邪魔をするものも即排除します。」

「何で、雨眞魏が…殺されなくちゃならないわけ!?!?。」

「死神とヴァンパイアの血を引く。それもただの死神とヴァンパイアじゃない。」

後から、何をされるか知った事じゃありません。

今、即排除せよとの命令なのです。罪人だからと言って、容赦はしません。」

少女は構える。

冷たい空気が流れる。

「私は、騎士団長、霧隠深紅。ある人の命<sup>めい</sup>で緋鬼瘤雨眞魏…。守りに来ました。」

「えっ?」

「はあ?」

「深紅?」

「兄様、私は雨眞魏さんを守りに来ました。」

騎士団の人々が雨眞魏さん目当てでこの学園にやってきます。

精々気をつけてください。」

「それなら、私だって雨眞魏を守る!」

「私もなの!？」

劉禰と乃亜が言う。

「……深紅ちゃん?。」

「雨眞魏さん…私はあなたを守ります…。」

「ありがとう…。」ニコッ

雨眞魏は気を失った。



「ただのつて言うか、美しい人間の色……美しい人間らしい、目撃情報によればだ。」

「私、その人知ってるかも……。」

「マジかよ!」

「私、人間の町に行った事があったの、それで美しいというより、綺麗な人間がいてね。」

「それも妖力が普通の妖力よりも強くて……恐ろしい人……だった。」

「うん!分かった!後は俺に任せろ!」ニコッ

梓がメモ帳にメモを書く。

「なら、私は兄様の護衛をします。」

「そうか?なら!全員聞け!」

「???」

白と黒が横に首を振った。

「自分が強いからつて一人になるのは禁止だ!

出歩くなら2〜3人だ!分かったか!?

「分かったの!」

「了解。」

皆承知した。

「澪は、人間だから複数で行動した方が良いかもしれないけど。」

「そうだな。人間も殺される確実が高い。だから!消して、一人になるな!

部屋も一人じゃなくて二人で一部屋だ!」

梓つて意外と……仕切り役が似合ってるね……。

劉禰は心からそう思った。

「えっと、白と黒は一緒の部屋。雨真魏と劉禰だ!乃亜と深紅!

澪と凌だ!いいか?」

「雨真魏と一緒にだね。じゃあ部屋さき戻ってるね。」

「おい！鍵！」

劉禰に鍵を渡す。

「ありがとう」「ニコッ

「白！鍵！」

白に鍵を投げる。

パシッ

「サンキュー！」「ニコッ

「澪、ほら。」

「ありがとう。」

澪に鍵を渡す。

「深紅！ほれ！」

「ありがとうございます！兄様！」

深紅に鍵を渡す。

梓は誰と一緒に部屋なんだろう？？…。

「雨真魏、私が運ぶよ。」

「そうか？ならいいけど。」

劉禰が狼の姿になり、雨真魏を抱える。

「深紅！よろしくなの」「ニコッ

「こちらこそ…よろしくお願いします。」

「乃亜！ちょっと。」

「何ですか？」

「深紅は人見知りだから、優しく接してやってくれよ」「ニコッ  
梓が乃亜の耳元で囁く。

「了解！なの」「ニコッ

「部屋広いねえく…。」

という皆の歓声の声だった。

### 13話 かばい

「ベッドふわふわだあ〜」

「そうだな。」

白がベッドに飛び込む。

黒はベッドに座る。

「……………」

深紅はずっと沈黙。

何を話したらいいのでしょうか?…。

「深紅、黙ってどうしたの?」

「あつ…いえ。」

深紅は人に気を使う人。

『全員、起きてるならもう寝ろ!今日は疲れたと思うからな!』  
梓が放送流して皆に伝える。

「黒〜寝よう〜」

「おう。」

白と黒は一緒にベッドで眠った。

「じゃあ、私達も寝るなの!」

「はい……………」

深紅と乃亜も眠りに入る。

「……………ZZZZ」

「……………寝れない……………」

漣はぐっすり寝ているが、凌は寝れない様子。

劉瀬はベッドから起きて、ベランダに出る。

パチツ……………」

雨眞魏が目を覚ます。

「瞬慧…。」

「ん、行くぞ。」

「うん…。」

雨真魏が瞬慧になり、部屋のドアから出て行った。

「涼しい〜」

劉禰が風にあたっていた。

「なんだ？」

『どうしたの？瞬慧？』

「俺らの歩いている道…魔力がどんどん濃くなっている。」

『魔力だけ？…。』

「近くだと、魔力、妖力も濃い。」

「遠くだよ妖力しか、分かん。」

『そっか…先に進んで。』

「おう。」

瞬慧は雨真魏を会話しながら進んだ。

「妖力？…。」

ベランダにいる劉禰が狼の姿になり、屋根の上にあがる。

「!?!?…。」

『瞬慧？』

「人間が人間を食っているぞ！」

『えっ!?!?』

「チツ！今は逃げるぞ！」

瞬慧は逃げようとする。

「誰か居ますね？」

「!?!?…。」

血だらけの男が瞬慧の目の前に現れた。

「人間が人間を食うってどういうことだ！お前は何者だ！  
普通の人間か！」  
「質問が多いですね。」

「あれは！瞬慧！行かないと！」

劉禰が瞬慧の元に行く。

「劉禰！」

「狼とヴァンパイアのハーフ、死神とヴァンパイアのハーフ…そう  
ですか。」

「僕は、瞬慧を連れ戻しに来ました」ニコッ

「なっ！？…。」

「行きましよう、瞬慧。」

「瞬慧！」

「白！黒！梓！って全員来たのか！？」

「瞬慧、静かに移動するのが下手なんだよぉ」

白達が瞬慧の元に来た。

「あれ？あいつが居ない！」

「チツ…逃げられたか…。」

「だけど、何であいつ、瞬慧達の秘密を…。」

「それは…。」

瞬慧は何かを言いかけるが…。

「いいから、全員学園に戻るぞ！」

「はい。」

梓が指示したら、皆学園方に戻る。

「！？…。」

「劉禰？」

「消えるわけが無い！まだいる！皆構えて！」

劉禰が指示する。



## 14話 目標

「瞬慧！瞬慧！」

白が瞬慧の名前を叫ぶ。

「人間が…刺したのですか？…。」

シルクがは啞然していた。

「そんな事って…。」

シルクはその場にしゃがみこむ。

「珍しい事もあるんだな…人間が化け物を平然に刺すなんて…。」

「あれは、普通の人間じゃない！」

劉禰が凜に言う。

「その人間は？…今何所に？…。」

「逃げたよ…瞬慧を刺して、余裕の無傷で消えた。」

「そう…教えてくれて…ありがとう…。」

由梨は凜と劉禰にお礼を言う。

「姿は…見ていないのか？…。」

「真夜中だったからね、分からない。」

「男か女は分かるだろう？」

「多分、男だったような？…。」

「人間は…一体何が…目的で…。」

皆いろいろと話していた。

「そんな小ざかしい話はいい！今は瞬慧だ！」

「そうとう、重傷だ！」

梓が仕切る。

「嫌だ…あの時と…一緒…これじゃあ…これじゃあ…。」

「白！大丈夫だ！大丈夫、だから。」

黒が白を抱きしめる。

「黒…僕は…。」

「白…。」

劉禰が白の隣に行く。

「ハア…ハア…ハア…うう…。」

「瞬慧！…血が…。」

瞬慧は無理に体を動かした。

血は大量に落ち流れる。

「うう…帰るぞ…。」

「瞬慧、お前傷、重傷だろう？」

梓が瞬慧の心配をする。

「お前に心配される…筋合いなど…ない…。」

瞬慧は血をポタポタッと落として、よろよると歩く。

「木の上」

「不思議な事も起きるのね…。」

木の上で瞬慧達を見ていたシルクがつぶやいた。

「ハア…ハア…。」

皆…俺より雨真魏の方がいいのだろう…俺より…雨真魏が…。

「瞬慧…大丈夫だよな？…。」

瞬慧の歩いた道には血が一粒一粒落ちていた。

由梨はその間に鈴を鳴らして、どこかに行っていた。

「カハッ！」

由梨は血を吐き、倒れる。

「ほらほら、僕に傷一つ付けられてないよ？」

君はこの程度の人間なんだあゝ」

不気味に笑った。

ゾクッ！

「!?!?。」

由梨は冷や汗が出た。

「……。」

「!?!?。」

由梨は相手に思いつきり腹を蹴られる。

壁までぶっ飛ばれる由梨。

「ガハッ！」

「由梨の血の匂い！」

劉禰が狼の姿になって、由梨の元に行く。

「君には、失望したよ。もう興味が無くなった。サヨナラ。」  
相手がナイフを由梨に向けて投げる。

「……。」

由梨は静かに目を閉じる。

カキンッ！

「!?!?……劉禰……。」

「お前、由梨に何してるんだよ！」

由梨に手を出すな！」

劉禰が牙でナイフをはじいた。

「由梨！」

「漣と凌!?!?」

「劉禰！」

澗と凌が由梨の元に来た。  
由梨は気を失っていた。

「何ごとよこれ？」

「大丈夫か？由梨！」

蒼弥は軽く由梨を揺らす。

「…だ…れ？」

由梨はかすかに蒼弥の顔を見た。

「えっと…会った事なかったか？…。」

「あなた、どちら様？」

「君に名乗る必要は無いよ」「ニコッ

相手は緋那に笑いかける。

「だけど、この子は貰っていくよ」「ニコッ

由梨をお姫様抱っこする。

「…あら？名前も無いのかしら？」「ニコッ

「ちよっ…それは困る！」

由梨を奪い取る。

「それは、幻覚。じゃあ。」

相手は由梨を連れて、消えた。

「由梨！」

15話 守る人(前書き)

久々更新です！

## 15話 守る人

「由梨の匂いがまだ、かすかにある。だけど、追うのは無謀すぎる。」

「森にある不思議な屋敷」

「由梨、寝ててね。」

相手は由梨にキスして何かを飲ませる。

由梨は眠りに付いた。

「学園」

「まずは、皆と話さないかね。」

「それが一番だよ。」

「……何か、凄い事になってるね。」

「この気配をたどったら飛べるのですが……。」

タツタツ……。

「ハア……気配が変わった……チツ……何かやらかしたな。あいつら……。」

瞬慧は胸騒ぎのせいで、学園にのろのろ戻った。

「白、黒何か分かんのか？」

梓が白と黒に聞く。

「僕は、お手あげだよ。気配が風のせいで消えかかっているからね。」

「俺もだ。」

「瞬慧……。」

梓はそっとつぶやいた。

「迷えば迷うほど…人は…闇に落ちて飲まれて死す…。」ボソッ

タツ

「ちよっ…深紅？」

深紅がどこかに行く。それを追う劉禰。

「あなたは何でここにいますか？」

「なんだ…騎士団娘か？…。」

「傷の再生が遅いですね。」

「今がチャンスじゃ無いのか？今の俺ならお前でも倒せるぞ。」

「私はあなたを、処刑しに参りました。」

「俺と雨真魏、いずれはどちらかが消える。」

「どちらかが消えるって…どういう…。」

「劉禰！？いつから…うう…ゲホッ！」

瞬慧から大量の血が流れる。

「瞬慧…いえ…裂闇志木！」

「えっ？…志木って？瞬慧？…。」

「俺はお前たちといずれ、戦う。それだけは覚悟しておくのだ…劉

禰。」

「えっ！？瞬慧！いつか戦うってどういう…。」

「瞬慧と言う名は…白が付けてくれた名前だ…。」

瞬慧は闇の中に消えた。

「志木！」

「白…。」

「まだ、傷が…。」

「志木じゃない…瞬慧。」

瞬慧はどこかに行こうとする。

何で…いつも…僕は…。

「志木！」

「なんだ？…。」

白が瞬慧を呼び止めた。

「行くなよ…。」

「!?!?…。」

「何で…志木が行くんだよ！何で何でいつも…。」

「白…強くなってくれ。」

「志木!…。」

「俺は、もう白の知っているあの時の志木じゃない…。」  
瞬慧は闇に消えた。

僕は守らないと…志木を僕が…。

「白！」

黒が白の元に来る。

「白！黒！瞬慧見なかった？」

「…。」

16話 闇無限 白編II前編(前書き)

白の過去編です！

16話 闇無限 白編II前編

僕の家はとても大きなお城のような、家だった。

そのせいで、両親は金にしに興味がなかった。

僕が黒と会うまでは僕はずっと、一人でただ監禁されていた。

とても寒くて、苦しくて、寂しくて、暗くて、誰も居ない。  
声もしない。誰もこない。

僕は何度も逃げ出した。だけど、すぐ、つかまって。  
何度も何度も逃げてはつかまって、暴力を振られた。

僕にはいつしか闇が生まれていた。

憎しみと恨みで出来た僕の闇。

そして、僕は……

憎しみを爆発させて……。

人々を殺した。

血が見るのが好きだから。

殺すのが好きだから。

楽しい事が好きだから。

だから…僕は…。

大切な人も殺してしまった。

無意識に殺してしまった。

悲しかった。寂しかった。

僕をずっと信じてくれた…人を…。

僕は…殺してしまった。

そして僕は…双子の兄に会った。血も繋がっていない。

僕とあの人と一緒の匂いがした。

そして僕は出会ってしまった…。

あの日、あの研究所で…『志木』と同じ気配をした『雨真魏』という少女に…。

17話 闇無限 白編II後編

僕は『危険人物』きけんじんぶつとされ。

とある、気味の悪い研究所に放り込まれた。

別に怖くもなかった。

こんな暗い部屋で一人になった方が、まだよかった。

その方が、よかった。

「君、いっぱい怪我してるね。」

一人の少女が声をかけてきた。

僕と一緒に研究所に放りこまれた死体。志木の死体は僕と一緒に研究所に放り込まれた。

「この人、死んじゃったの？」

「えっ?…。」

「可哀想…。」

「……。」

僕が志木を殺した、なんてこんな知らない人に言えなかった…。

だけど、一つだけ似ていた。

志木に…。

暖かさと優しい匂いがした…。

「私、緋鬼瘤雨真魏。よろしくね」「ニッコシ

「僕は…青柳…白。」

「白君か、まずはその傷の手当てからしよっ」「ニッコシ

「うん。」

雨真魏はとても優しくかった。

こんな暗い研究所で一人でいるなんて……”寂しく”ないのかなって……。

「雨真魏はいつから、ここに居るの？」

「覚えてない。」ニコッ

「どうして？」

「目が覚めたらこの研究所に居たんだ」ニコッ

「そっか。」

ガラッ！

「!?!?。」

「誰か来た、お客さんかな？」

「ハア…ハア…白！」

「黒兄様……。」

研究所に来たのは、黒だった。

息が荒く、足は酷く怪我をしていた。

「どうして?…こんな所に?…。」

「お前が心配だったんだよ！」

「!?!?。」

「違う…色。雨真魏と違う色。」

「えっ?誰？」

奥から、一人の男の人が出てきた。

「この人は、幸杜梓。私の友達だよ」ニコッ

「青柳…白。」

「青柳黒だ……。」

「白の色は目の色と一緒に、とても優しい向日葵の色。」

黒の色は目の色と一緒に、必死で心配症な自然の色だぜ!」ニコッ

「僕が向日葵!?!?…って…黒兄様が心配症?!…。」

「なっ！…ちが！違うぞ！白！…！！！！！」

黒は顔を真っ赤にした。

「じゃあ、ここは4人の思い出の場所にしましょう」「ニコッ

「思い出の？…。」

「場所。」

「はい。白にはこれ。黒にはこれをあげるよ」「ニコッ

雨真魏は白と黒にお揃いのガラスのペンダントを渡した。

「ありがとう！雨真魏！黒！おそろいだよ」「ニコッ

「！？…やっつと、名前で呼んだな、白」「ニコッ

そして、僕達は旅に出てそれっきりでそして学園に雨真魏と梓がいるという噂を聞いて

学園に入った。

僕は、友達を仲間を…守る！…それが僕の誓いだから！

## 18話 分かり合う

白と黒はとても悲しく暗い顔をしていた。

「二人とも、どうかしたの？」

劉禰は瞬慧を探している様子だった。

「早く、瞬慧探せよ。っと！気をつけるよ！」ニッコッ

「……。」

黒の微笑みは心から笑っていなかった。

「何で瞬慧、何所いるか分かるくせに隠すわけ！

確かに、私は役に立てないと思うよ！

「……私には私なりに頑張ってる……みんなの役に立とうとしているの！」

「いきなり怒るなよ！」

「……劉禰に何が……分かるんだよ。」

「白、やめろ。」

黒が白を止めようとするが……。

「僕はずっと笑ってて欲しかった！

「ずっとずっと……僕と一緒に……僕の隣であの向日葵のような笑顔が見たかった！」

「何で仲間でもない！他人に協力しないといけないんだよ！」

「僕には分からない……なんで僕は……僕は……。」

白は大声で劉禰に言った。

「協力するのは当たり前でしょう！だって白と黒と私は友達でしょう！」

「……」

「……」

「友達じゃない！仲間でもない！だから、協力なんてしないよ！…。  
化け物も人間も一緒じゃん！ただ、他人を裏切るだけ！  
どうせ、劉禰だって、僕の事。裏切るんでしよう！？」

白も泣きそうな顔をして言った。

「私は今まで1人でいて！皆と初めて友達になれて嬉しかったけど…

白だけは私の事そんな風に思ってたんだ！」

ポルンツ…ザッーザッー

雨が白と劉禰と黒をぬらした。

「何が…分かるんだよ…僕に何が…人間もどうでもよかった。

志木以外の人間どうでもよかった…僕にとっては、志木が僕の全  
てだった！」

「だったら！気持ちを言えばいいじゃない！何で言わないのよ！」  
白と劉禰は必死だった。

ポタンツ

白の目には、涙がこぼれていた。

「僕は…志木が居ないと…永久に迷路をさ迷うんだよ…。」

「喧嘩、している場合ない。瞬彗を追うぞ。」

「あっ！瞬…いや…志木！」

「白！おい！」

「そうだね…追わないと…。」  
皆瞬彗を追っていた。

〓その頃〓

「ハア…ハア…。」

「止まって下さい。」

「お前は…。」

「瞬慧…いや、もう志木と言ってもいいでしょうか？」ニッコ

「勝手にしろ！俺は、まだつかまらない！」

瞬慧は氷の刃を構える。

「いた！、瞬慧！」

## 19話 助っ人

「つて、劉禰！お前ら!？」

瞬慧の後ろから劉禰達が来た。

「志木…。」

「白…。」

「志木…えつと…。」

「ごめん…。」ボソッ

「えっ?」

瞬慧は白に背を向ける。

素直じゃないんだから…。

劉禰はちよつと微笑んだ。

「木の陰」

「行かないのですか?…。」

「…今の状況は…どうみても無理だろう?…。」

「……。」

「なぜ、瞬慧を欲しがるんだ!」

「志木を欲しがるのは、私の興味本位ですよ。」ニコッ

「興味本位とか、馬鹿だろう?」

劉禰が相手を馬鹿にする。

「志木、私と着なさい。」

「おい！俺は志木じゃねえー！瞬慧だ!」

「!?!?…瞬慧…。」

「チツ…瞬慧を渡すわけないでしょう!」

劉禰が狼の姿になる。

「はあ…俺もう、限界。」

「瞬慧！？」

瞬慧が地面に座り込む。

「お前は…俺の事、憎いんじゃないのか？白？」

「?!…瞬慧…。」

「まあ…俺は…好きだけど…魔力戻るまで戦ってくれ！」

「アイアイサー！黒！」

「おう！」

白と黒は武器を構える。

「なら、私は瞬慧を守る！あいつは二人に任せるわ！」

劉禰は瞬慧の前に立つ。

「僕、ちよつと楽しくなってきた！」

「俺も！」

白は相手に弾を連発で撃つ。

それと同時に黒が相手に一瞬にして近づく。

「あなた達は、私には勝てません。」

「うっせ！」

黒は剣を振る。

「瞬慧は私が…守るんだから！」

「zzzz」

瞬慧は木にもたれて寝ていた。

「姉様！…行きます！」

横から、深紅と深香が突っ込んできた。

そして黒はぎりぎりセーフでよけた。

「おい！深紅！突っ込んでくんじゃねえーよ！」

「それが、戦ですよ！黒さん！」

「チツ！だから、困るんだよ。騎士の女は…。」

「黒！よけてね！…！」

「ん？うわぁ！」

黒の下から白が大きな銃を召喚して何発も撃っている。

「お前もあぶねえーよ!」

「あはははは、だからよけてって言ったじゃん」「ニコッ  
ムカツク。」

「あつ!待ちなさい!」

相手が、劉禰と瞬慧の目の前に居た。

「瞬慧!」

「あなたを処刑します!」

「私は、瞬慧を守る!…あんなんかに負けない!」

劉禰は牙で攻撃する。

「雑魚は、本当に鬱陶しいですね。」

「!?!。」

「ああ?!?!」

深紅と劉禰の首を絞めた。

「うう…!?!。」

「チツ…!?!。」

バキューンツ!

相手の手に白の弾が貫いた。

深紅と劉禰は首を放された。

「お前の相手は僕だよ。忘れるな!」

「姉様!行きます!」

深紅と白が相手に向かう。

「雑魚はとつとと死になさい!?!?!?!」

深紅、白、黒、劉禰を一瞬にして、壁の方に吹き飛ばした。

「!?!ガハッ!」

「ゲホッ!ゲホッ!…。」

「うう…瞬慧…。」

「ゴホッゴホッ…。」

白、黒、深紅、劉禰はそのまま血を流して、気絶してしまった。

「瞬慧…やっと。」  
瞬慧に近づいてくる。  
そして剣を出した。  
そして、瞬慧を刺そうとする。  
「ZZZZZ」

「瞬…慧!…。」  
白の小さな声が聞こえた。

カキンッ!  
「本当に…お前ら、何してるんだよ。」  
梓が瞬慧の目の前に来て、剣を剣で受け止めていた。  
「チッ…次から次えと!…。」

「俺の許可なしに、学園の奴に怪我させてんじゃねえーよ!」

20話【番外編】料理（前書き）

再び番外編です！

今回は【料理編】！劉禰と瞬慧が主役です！



という、事だ。

「あずあずの馬鹿！！！！！！」

「あずあず！言うな！」

「はあく…それにしても本当に腹減った」

三人の会話は廊下に響いていた。

「三人とも、どうかしたの？」

澁が廊下から三人に話しかけてきた。

「兄様？」

深紅も来た。

「いや…別に。」

しょうがない！もう、こいつらに…殺人鬼の料理を食わせないと！

「そう？なら別にいいけど…。」

「そうですか？…別に構いません。」

深紅と澁はあまり、気にしなかった。

「何をしているんだ？」

「ご飯まだなの？」

緋那と蒼弥が来た。

「いや！、今瞬慧と劉禰作ってるから！待て！」

「そう？なら待ってよあ〜」

「そうだな…。」

蒼弥と緋那が椅子に座った。

台所

「おお！劉禰、やるぞー！」



気絶しているものもいた。そして天国に言っているものも居た…。

続いて、瞬慧の料理…。

パクッ

瞬慧の料理を食べる深紅と黒。

「おいしいですよ。」

「普通。」

と二人のコメント。

他の人が食べると…。

魂が抜けたらしいです。

こうして、不幸な料理の日は終わったのだった。

## 21話 守りたいから

「おやあー、これは梓じゃないですか。」

「俺の名前を気安く呼ぶな！」

「おやあー、私には厳しいですね。」

「うつせな！」

「あなたには罰をあたえます。」

「チツ。。。」

どうする…俺戦えないし…。

相手は梓の方に剣を振る。

梓は軽々とよける。

「おや？どうしました？私相手に素手はさすがにきついですよ。」

「…うつせ！」

武器持っても、俺、ヘタレだからなあ…。

シュツ！

「チツ。。。」

頬に剣がかすった。

頬から血が出る。

「はあ…私も少し遊び過ぎました。では。」

「あっちよつと待て！」

「…梓やめろ。」

凜が後ろから、梓を止める。

「チツ、手当てしてやれ。」

梓が指示すると皆動いてくれる。

重傷なのは、白と黒と深紅と劉襴だった。

「ZZZZ」

瞬慧は寝ていた。

起きる気配がまったくなかった。

「はあ…瞬慧…。」

「ZZZZ」

梓は瞬慧をお姫様抱っこをした。

「全員、学園に戻るぞ！」

「はい。」

そうして、長い一日は終わった。

パチッ

「ん？…あれ？私…いつの間に寝てたんだろっ？」

瞬慧ではなく、雨真魏の人格で目を覚ました。

「！？…皆…凄い怪我！？」

雨真魏の隣には、大怪我をした、白達がいた。

ガラッ

梓が入ってきた。

「梓…！？…梓も怪我、してる！」

「ああ…かすり傷だ。」

「だけど…。」

雨真魏が悲しい顔をする。

「…大丈夫だつて！雨真魏は心配すんな」ニコッ

「梓…ごめんね…。」

雨真魏は部屋から出て行った。

「はあ…間違えた…雨真魏絶対…落ち込んでるわな…。」

「廊下」

私は、何をしてたんだろう？皆が怪我をしてたのはなぜ？…。  
何で…私、こんな時に何も知らないの？…馬鹿みたいじゃん…。

ポタンッ

「雨眞魏？」

「!?!?。」

雨眞魏は顔を拭く。

「どうかしたのか?。」

「…いや!…な…なんでもないよ」「ニコッ

「そうか?…ならいいが…。」

少し…ないているように見えたが、気のせいか?…。

「じゃあ、私、用事あるから!じゃあね」「ニコッ

「あつ…雨眞…?!。」

雨眞魏は蒼弥に背を向けてどこかに去った。

私は…本当に何も出来ないの?…瞬慧…あなたは一体…何をしたの  
?…。

ドンッ!

雨眞魏が誰かとぶつかった。

「梓…。」

「大丈夫か?。」

「お前、目が赤いぞ?。」

「あつ…ちよっとね。」

「…悪かったよ…。」

「えっ?…。」

「俺さ…。」

「??…。」

梓が真剣な顔で雨真魏に言う。

「雨真魏は俺が守るからな!」

「えっ!?!…あっ…えっ?!」

雨真魏はなぜか、顔を真っ赤にさせた。

「なんだよ…その反応?!」

梓も雨真魏を見て、顔を真っ赤にさせた。

「梓が…恥ずかしい台詞言うからでしよう!?!」

「俺は!…お前のためを思って…。」

ハッ!

「…。」

少しの間、沈黙が続いた。

「だけど、ありがとう。梓」「ニコッ

「!?!…。」

梓は顔を真っ赤にさせた。

## 22話 学園パーティー 前編

「あれ？雨真魏、朝から何してるの？」

「劉禰ちゃん…。」

朝、起き立ての劉禰。

そして、雨真魏は朝から折り紙をやっていた。

「折り紙だよ？」

「それは分かるけど、何で今日に？」

「ああ…ちよつとね」「ニコッ

「??。」

劉禰は首を横にかしげて、どこかに去る。

「雨真魏、これでいいのか？」

「うん。ありがとう。梓」「ニコッ

梓は大荷物を持って、雨真魏に話しかける。

「本当に、俺と雨真魏二人だけですんのか？」

「白と黒はこの部屋の見張り番なの。しょうがないよ」「ニコッ

「深紅は?…。」

「深紅ちゃんは、お疲れなの！だから梓と私だけ！」

「ああ…はいはい。」

梓は大荷物を机の上においた。

今日は、学園でパーティーをしようと思います。

「あれ？ロビー…立ち入り禁止になってんだけど…。」

「そうだな。」

澪と凌がロビー前で看板を見る。

「どうしたんだ?…。」

「どうしたのかしら?。」

その後ろから緋那と蒼弥が来た。

「ああ…蒼弥と緋那。この看板見てくれよ。」  
「??…ただいま、立ち入り禁止。」  
「どういう事かしら?…」  
「さあーな。」  
「いいから、もう入っちゃいましょう。」  
「おい…緋那。」  
緋那がロビーに入ろうとすると…。  
バキューンッ!  
銃声の音が緋那達を沈黙にする。

「えっ!?!…白?」  
「つて、黒まで?!」  
白と黒が武器を構えていた。  
「お前ら、何してるんだ?」  
「つて、仲間に何してるのかしら?」  
緋那が怒る。

「ここは、立ち入り禁止。分かってる?」  
「なっ?!…。」  
白が黒い顔で笑った。  
緋那が白の顔を見てイラついた。  
「なぜ、入れないんだ?」  
「ああ…今、取り込み中だ。」  
「僕達がこの番人!」ニッコツ  
「なっ!?!…。」  
「いつになったら、入れるんだ?」  
凌が冷静に聞く。

「夜だね。」  
「そうか。漣一部屋に戻ろうぜ。」  
「あっ…うん!」  
漣と凌が自分の部屋に戻った。

「じゃあ俺達も戻るか？」

「……ええ…そうね。」

緋那は1回白をにらんで部屋に戻った。

「雨真魏達、大丈夫かなあ〜??」

「知るか。」

「ロビー」

「雨真魏、ほれ。」

「おお！ありがとう」「ニコッ

「2人で夜までに出来るのか？」

「分からないけど、無理でもやる！」

「はあ〜…分かった。」

梓と雨真魏は黙々と作業を進めていた。

「何か、思ったんだけどさ。」

「ん？何？白、改まって…。」

「いや…だからあ〜…うーん…。」

白と黒はジュースを飲んでいた。

「この学園、おかしな事件とか、おかしな事とか、おこりやすいよね。」

「それもそうだな。それも偶然だろう?…。」

「偶然じゃなかったら?…。」

「!?!?…。」

「もしも…必然だとしたら?…。」

白が黒に近づぐ。

「白、黒。何してんの?こんな所でいちゃつかないですよ。」

劉禰が白と黒を見て言う。

「別にいちゃついてない!…。」

「そうだね。」「ニコッ

「あんたら、禁断の双子かよ…。」

「そうかもね」「ニコッ

白は笑って流す。

「そんな訳ねえーだろうが。」

黒はいやみっぽく流す。

「はははは、それもそーかい。って入っていい？」

「駄目だよおー」

「何で？」

「駄目なものは駄目。以上。」

「白のケチ！」

「なんとも言えば…。」

ガタンッ

ロビーのドアが開いた。

「あっ…劉禰ちゃん!？」

「雨真魏?!何で…立ち入り禁止って…。」

23話 学園パーティー 後編(前書き)

新しい小説始めようと思います！

皆さん是非、見てくださいな^^

## 23話 学園パーティー 後編

「劉禰ちゃん!...。」

「何で、雨真魏だけずるいよ!私も入れてよ、白、黒。」  
「駄目だよおー」

「そつだ。これは命令だからな。」

「命令?...誰の?...。」

「!?...。」「ギクツ!

「まあ、誰でもいいだろうおー」

「そつだよ」「ニコッ

「はあ...分かったよ...じゃあ部屋戻るね。」

劉禰は部屋に戻った。

「はあ...ありがと。白、黒。」「ニコッ

「別に...。」

「雨真魏の頼みだしね」「ニコッ

「そつか。じゃあ私、さっさと準備するね!」「ニコッ

「うん!」

「頑張れよ。」

「うん!」「ニコッ

雨真魏は部屋に入って行った。

==ロビー==

「梓、飾りつけ、出来た?」

「おう。あと一つそつちは?」

「もう少し...。」

「ん。分かった。」

梓は部屋の飾りつけ。雨真魏は料理全般。

雨真魏の顔を笑っていた。とても嬉しそうな顔で。

皆のこんな事初めてだな…楽しみだし…嬉しいな！

「……………」

梓はちよつと寂しい顔をした。

「梓？……………」

「あつ…ちよつと飲み物買ってる来る。」

「うん！行ってらっしゃい」ニコッ

「おう。」

梓は部屋を後にした。

「どこかの部屋」

「ねえ、蒼弥。」

「ん？なんだ？」

「何か、妙に白と黒おかしいと思わないかしら？」

「どうしてだ？……………」

「何か、隠してるって思うんだけど……………」

「気のせいだろう？……………」

蒼弥は本を読んでいて緋那の話をあんまり聞かなかった。

「乃亜ー久しぶり」ニコッ

「劉禰！お久しぶりですの」ニコッ

「何してたの？」

「ちよつと、用事だったの」ニコッ

「そう。ならいいけど」ニコッ

乃亜と劉禰が二人、嬉しく会話していた。

「はあ…僕、疲れた。」

「俺も。」

「ほら。」

「梓…。」

「うわぁー、ジュースだぁー」

「サンキュー！」

梓は、白と黒に飲み物を渡した。

白と黒は飲む。

「お疲れ様…。」ボソツ

「!?!?。」

梓は、部屋に入って言った。

白には一瞬、何かが聞こえた。

「どうした？白？」

「いや…」ニコツ

本当に…素直じゃないね…アズアズ。

「チツ…。」

梓はちよつと頬を赤く染めていた。

「梓、おかえり」ニコツ

「おう。料理、手伝うぜ。」

「ありがとう、助かるよ」ニコツ

雨真魏を梓は二人で料理をしていた。

そして 午後6時

「白!、いつになったら入れるの？」

「7時じゃないの？」

「後、一時間も待たなきゃならないの!?!?」  
皆苛立っていた。

ガラッ!

ロビーのドアが開いた。

「皆、お待たせ、さあ！入って」「ニコッ

「雨真魏…何？」

皆、ロビーに入った。

「うわぁ！？…。」

皆ロビーに驚いた。

「何、今日は何かするの？」

「今日はね、パーティーをしたいなあーって…。」「ニコッ

雨真魏が皆に言う。

「雨真魏、ありがとう」「ニコッ

「！？…。」

雨真魏は頬を赤く染めた。

こうして、学園パーティーは楽しく、面白く、終わった。

「こんな楽しい事も楽しいなあ…。」「ニコッ

23話 学園パーティー 後編(後書き)

雨真魏の口調が敬語になりかけるww  
何でだろっ? ? ww



「どうしたんだろっ?」

劉禰と雨眞魏は慌てて、下におりる。

「あなたはここで処刑します!」

「無理なものは無理だつての。」

「もう!大人しくてなさい!姉様!」

深紅と一人のフードをかぶった、男の子(?)が争っていた。

「どうしたの?」

「あっ!...いや、ちょっとほっといてやれ。」

梓は思い出したくない顔をしていた。

「ん?あっ...雨眞魏!!!!!!」

フードをかぶった人が雨眞魏に抱きついてくる。

「キヤア!...何?...」

「雨眞魏、大丈夫か?」

「雨眞魏!相変わらず、可愛い!」ニコッ

「えっ...と...放せ!黒鳥!」

「あれ?瞬替!」

フードが取れた。それは女の子だった。

「で、誰?」

「あれ?わしの事知らないの?アズアズ先輩!説明よろしくっす!」

「だから...アズアズって呼ぶな!」

「先輩?」

皆頭の上にはてなが浮かんでいた。

「こいつは、黒鋼黒鳥くろがねからす。情報屋で俺の後輩。

で、今じゃ、SS級の犯罪者だ。」

「SS級

皆が驚く。

SS級とは、滅多に人にも使われないほどの犯罪者。

「ふぁ〜…眠い。」

白が起きてきた。

「し…し…白…!…!…!…!…!…」

「うわぁ!?!」

黒鳥が白に抱きついた。

「うわぁ…黒鳥…!?!」

「相変わらず可愛いなぁ〜お前!」「ニッコッ

「うう…やめる…黒鳥…。」

白は顔を真っ赤にさせて言う。

バシッ

「あれ?…。」

黒鳥の手を誰かがはじいた。

「黒鋼。あんまり俺の白に触るな。」

「黒…。」

「へっへ〜…相変わらず、ツンツンだねえ〜黒りん〜」

「黒りん!言うな!ボケ!?!」

「あれれ〜にやははは。」

「チッ…。」

白はちよつと頬を赤く染めていた。

「どうした?白?」

「!?!…べ…別になんでもない…。」

「???…。」

「にやはははは、これからよろしくな」「ニッコッ

25話 騎士と犯罪 前編(前書き)

更新しなくて、ごめんなさい><!  
物語がなかなか思いつかなくてww



「じゃあさ、1回死ぬか？深紅？」

「!?!?。」

「わしが殺してやる！」

ジャキツ!

「雨真魏?…。」

「!?!?。」

深紅と黒鳥の前に一本の剣が地面に刺さった。

「いい加減にしろ！お前ら！朝から鬱陶しい！

うるさすぎて寝られないんだよ！」

「瞬慧!?!?。」

「チツ…。」

瞬慧のおかげで黒鳥と深紅は治まった。

”死ぬ”…私が?…姉様を残して…死…。

「!?!?。」

瞬慧は深紅の何かを知っていた。

人は…何か無しでは生きれない…。

「!?!?。」

「瞬慧?どうかしたか？」

「いや…なんでもない。」

「そうか、それならいい。」

「おう…先に行っててくれ。」

「おう。」

瞬慧はどこかふらりと歩いていた。

「ゲホツ！ゲホツ！ゲホツ！…。」

俺の体も…もう…。

人は何かなしでは生きれない。

人は何かを隠して生きている。

人はいつでも半信半疑で生きている。

「今日は…ここまで…また、会えるかな？雨真魏」

## 26話 騎士と犯罪 中編

「はあ…暇だ…。」

黒鳥は自分の部屋のベッドで寝転んでつぶやいていた。

黒鳥は一人部屋だった。

「兎くどうしたらいいのだろうな？」

黒鳥の服の中から黒い兎が出てきた。

「何が？…。」

そして、兎は喋りだした。

「わしは…なんで、罪を重ねるのだろうな？」

「知らないわよ。なら騎士へ言つて、つかまるの？」

「それは無理な話だ。わしにはやる事がある。」

「そう、なら。罪を重ねる事ね。」

「はあ…相変わらず、兎は言い方がきついなあ…」

「それもしないと、あなたが立ち直らないでしょう？」

「それもそうだな…。」

「ふん…私は、寝るわ。」

「分かった。」

兎は黒鳥の服の中に戻って行った。

「はあ…瞬慧、居ないのかあ…」

「なんだ？」

「うわあ!？」

黒鳥の部屋の後ろの窓から瞬慧が顔を出した。

「何で、そんなに驚くんのだ？お前、俺を呼んだらうが。」

「あつ…ごめん。」

「チツ…。」

「で、瞬慧は何してるんだ？」

「別に、ただ…暇だからな。」

「ふん…。」

黒鳥が窓から飛び降りた。

「お前、何してるんだ？」

「わしの相手は、あの子がやってくれるんだってさあ」

「…深紅…。」

「黒鋼黒鳥！あなたは私が処刑します！」

「やれると思う？君が？」

「黙りなさい！」

「あっおい！」

黒鳥と深紅は戦うオーラを放っていた。

「騎士団として、あなたを見逃す事は無用！排除します。」

「怖いねえ〜だけど、その瞳たまらんな。」

黒鳥はとて不気味な笑った顔を見せた。

「姉様！」

「あれえ〜自分は戦わないのか？しょうもないねえ〜」

「うるさい！あなたに何が分かるんですか！あなたに…犯罪者のあ

なたに！」

「分かるわけじゃないじゃん。人間なんてとてももろい。」

「うるさい！人形！」

深紅の持っている、人形が巨大化した。

「ほえ〜、その人形、戦うんだあ〜意外な情報ゲットッ！」

「うるさい！姉様！人形！」

深紅の人形と深香<sup>あね</sup>が黒鳥に襲い掛かる。

「遅い。何もかも、遅い。」

「!?!?。」

「君もだよ…深紅。」

深紅の目の前に黒鳥が居た。

「はい。終了。」

「!?!?。」

深紅の首に肩車を置く。

「?!?!?…何で…。」

深紅はそのまま座り込んだ。

「何で?…はあ…君は普段、とても真面目だけど。頭に血が上ると  
我を忘れ、

何でも発動しちゃう癖があるんだね。」

「!?!?。」

ポタンツザーツ

雨が降って来た。

「…うう…私は…。」

「わしは、君の事情など知らない。だけど君は今、やりたい事がある  
んだったら

わしは、深紅に協力する。」

「!?!?。」

「わしを仲間だと思って欲しい。」

深紅に手を差し伸べる黒鳥。

「!?!?。」

深紅の頭にうつったのは、幼い頃の記憶…。

「僕の仲間になるうよ、深紅」ニコッ  
一人の若い少年が笑った、姿。

「うう……うう……はい……仲間……です。」

「泣くなよ。深紅！」

「うう。。。」

黒鳥は優しく雨の中、深紅をそっと静かに抱きしめた。

”仲間”それは”絆”で出来た欠片。

「もうすぐ、会えるかな」雨真魏「ニコッ



「うん。」「ニコッ

「雨眞魏さん?…。」

「バタンッ!

「!?!…雨眞魏さん!雨眞魏さん!

雨眞魏が倒れた。

「どうしたの?雨眞魏!?!」

「劉禰さん…。」

深紅は不安な顔をしていた半分焦りを見せていた。

「大丈夫、雨眞魏は大丈夫だから。」

「はい…。」

「姉様!…姉様!嫌!…嫌!姉様!…姉様!…!?!?!?!?!」

あの頃は何も分からなかった。

何も、誰も教えてくれなかった…。

私が…”模造品”だから…私が…”処分品”の出来損ないだから…。

「深紅?。」

「…。」

「深紅?」

「…痛ッ!」

「深紅!?!どうしたの?大丈夫?」

「あっはい…。すみません。」

深紅は自分の部屋に入って行った。

「……………」  
深紅の腕を見てみると、道化師ドイロの模様の付いた黒いマークがあった。  
とても濃く書かれていた。

「……………」  
深紅はゆたりを座り込んだ。

タツタツ

「深紅に、雨真魏に、白は、模造品。もう引き取るか。」「ニヤッ

「姉様…。姉様…。寂しい…。」  
バタンツ

深紅はそつとドアの前に倒れた。

「瞬慧?!…。」

「ん?…劉禰か?飯か?なら俺は食べに行く!じゃあな!」

「ちよつ!瞬慧!」

瞬慧は食堂に向かった。

そんな瞬慧を追いかける劉禰。

「ゲホツ…。」

「大丈夫?風邪?」

「たいしたことない!大丈夫だ!」

「そつ?ならいいけど…。」

雨真魏の憎しみが…また増してるな。

## 28話 闇の住人

真つ暗な部屋。その部屋に一つの椅子が置いていた。その椅子に座っている。女の子。

「ねえ、咲く。もう行っちゃおう。会いたくてたんない。」

「まだ、待ってください。」

「はあ、暇だなあ。」

ねえ、雨真魏。あなたはいつ死ぬの？…。

「模造品。」

「ゲホツ！…ゲホツ！ゲホツ！」

「ちよつと、瞬慧！大丈夫？」

「志木！大丈夫？」

「あつ…大丈夫だ。ただの風邪だ。」

「もう一週間だよ。そんなにせきが続くわけないでしょう？」

「別に、せきが出るからって、あまり気にする事はないだろう？」

「それもそうだけど…瞬慧。」

「もう、心配するな！俺は平気だ！ちよつと外の空気を吸ってくる。」

「あつ！瞬慧！」

「…。」

瞬慧は逃げるように学園の屋根に行った。

「はあ…。」

「何をそんなにため息になるんだ？」

「ん？…黒か？」

「そうだけど、何か、鈍くなってる。」

「何がだ？」

「反応、判断、行動が。」

「！？…気づいていたか…。」

瞬慧は深刻そうな顔をした。

「何か、隠してるだろう？」

「…どうだろうな。」

「なんだよ、それ。」

「ゲホッ！ゲホッ！…ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！」

「おい！大丈夫かよ？」

瞬慧は座り込んだ。

「大丈夫だ…ただの風邪だ。」

「そんなにもせきが激しいか？」

「俺のせきはそんなものだ…。」

「そうか。水と薬持ってくるから。ここにいるよ。」

「分かっている。黒。」

薬と水を取りに行こうとする、黒を引き止めた。

「ありがとう。」

「！？…別に…ここから動くなよ…！」

「おう。」

黒は顔を真っ赤にして走って下の階に行った。

瞬慧。迎えに来たよお〜

ドクンッ！

「!?!?。」  
「バリツバリツ」

「学園の結界を…すり抜けたか?…チツ…あつ…黒悪い!」  
瞬慧は屋根から飛び降りた。  
地面にちゃんと着地した。

「わあーこの結果。凄いやあ〜だけど。こんなんじゃ僕を倒せないよあ〜」

カキンツ!

剣が重なった音が響いた。

「あれあ〜、凄い歓迎だね。って久しぶりだね。」ニコツ

「お前!何しに来た!」

「ほえ〜久々の挨拶がこれって酷くない?志木〜」ニコツ

「うつせな!」

カキンツ!カキンツ!カキンツ!

その頃

パリンツ!

「瞬慧!…。」

黒はコップを落として割ってしまった。

「あいつ!…あんな体じゃ戦えねえーだろうが!」

黒はすぐさま、瞬慧の元に行った。

「志木〜あえて嬉しいよあ〜」

「相変わらず、ウザいんだよ!」

「あれ〜もしかして、苛々してる?」

「当たり前だ!」

カキンツ!…

「あつ…傘があ〜…。」

瞬慧を相手をしている少女は武器である傘が飛ばされた。

「終わったな。」

「それはどうかな？」

「はあ？…！？…。」

ドクンッ

「ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！…ゲホッ！…。」

「貰った〜」ニコッ

「！？…。」

グサッ！

「志木〜僕と行こう。模造品の君と僕で一緒に行こう」「ニコッ

「ハア…ハア…お前は…！…。」

「はあ〜…相変わらず、往生際の悪い。」

グサッ！

「ああ！？…クッ！…。」

「ねえ、もつと悲鳴を聞かせてよお〜志木！？」

「うっせ…。ハア…ハア…。」

瞬慧は右肩をグサッと逝かれていた。

大量の血が流れていた。

「志木〜」ニコッ

「…黙れ…！！！！！」

瞬慧は左手で刀を振った。

「ただ、軽々しくよけられる。

「まだ、動けるのかあ？。ねえ、そんなに憎しみ、恨みたっぷりだと、

またマークが濃くなる一方だよ。」

「！？…ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！…うっ…ゲホッ」

瞬慧は口から大量の血を吐いた。

「瞬慧！」

「志木！」

「!?!?…白…黒…お前ら…遅すぎ…。」

ボタンッ!

「志木!」

「瞬替!」

瞬替が倒れた。

29話 『仲間だからです。』 (前書き)

今回のサブタイトルは、キャラの台詞にしてみましたww

29話 『仲間だからです。』

「志木！」

「あれ？志木はおねんね？」ニコッ

「お前…何者だ！結界を通り抜けたのか？…。」

黒は驚いて。

学園の結界は絶対誰も通れない。完全防壁。

「あれ？君は、白君？見つけた！見つけたよ！咲く！」ニコッ

「咲く？…。」

少女の後ろから背の高い男が現れた。

「!?!?…。」

白は一瞬にして、体が震えだしていた。

「おや、ここに居ましたか。白様。お迎えに参りました」ニコッ

「何言ってるんだよ!?!？」

「白様、帰りましょう」ニコッ

「嫌だ…嫌だ！」

「うう…。」

「志木！」

瞬慧はちよつとおきた。

「白…動けるか?…。」

「えっ?…うん…。」

「おや、まだ動けますか？」

「お前は白のなんだ！」

「うるさいですね。執事ですよ。」

「えっ!?!?…。」

黒は一瞬にして、男に吹き飛ばされた。

「ガハッ！」

「黒！」

「白…逃げる…。」

黒は気を失った。

「さあ、帰りましょう」「ニコッ

「嫌…嫌だ…嫌だ……。」

白はとても震えていた。

「うう…お前ら…勝手な事やってんじゃねえぞ…。」

瞬慧はよろよろ立った。

「志木!…。」

「白…黒を連れて…逃げろ。」

「だけど志木が!」

「俺は…もう逃げないよ…大丈夫。」

「志木!」

「いいから行け!…ゲホッ!」

「志木…嫌だよ!」

「白…。」

白は瞬慧の言葉を拒否った。

「僕はもう志木を苦しめたくない!志木を守るのが僕の誓いなんだ

よ!」

「!?!?。」

瞬慧は白の言葉に驚いていた。

「ん?!?岬さかき、何か来ます。」

「分かってるってえ!」ニコッ

「姉様!」

「!?!?。」

瞬慧達の目の前には、深紅が来た。

「深紅!?!」

「騎士娘!?!」

「姉様!」

「…。」

深香が白と黒と瞬慧をかかえて学園の方に戻って行った。

「深紅！何してるんだよ！君も！」

「…皆様…今までありがとうございました。」

「!?!?。」

「騎士娘！やめろ！お前ではそいつらは倒せない！やめろ！」

瞬慧と白は大声で言った。

「私は、皆様に会いえて幸せでした。だから…。」

深紅の目には一粒一粒涙が零れ落ちていた。

「深紅！」

「仲間だからです。だから、守りたい！だから、大切だと思ったのです！」

「今までありがとうございました。姉様も頼みます！人形！」

バベット

「やめろ!!!!!!!!!!!!!!」

そのまま、学園には特別な結界が張られた。

深紅はどうなったのかは不明だった。

「梓!…深紅は?」

「いない。もう、敵もない。」

「?!?。」

白はとてもシヨクシヨクな顔をしていた。

「……ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！」

瞬慧はよろよろ立っていた。

「志木!…。」

「…白…。」

「うう…。」

白は瞬慧に抱きついて泣いた。

「大丈夫だ。深紅は死んでない。安心しろ。」

「うん…分かってるよ。」

『仲間だからです！だから、守りたい！』

お前から…そんな言葉を聞くとはな…騎士娘…。

黒はとても重傷だった。

それから、一週間。深紅は行方不明。

そして、瞬替の体もどんどん悪化してきたのだった。

**30話 襲撃 前編（前書き）**

30話行きました！

30話 襲撃 前編

「ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！」

瞬慧は雨眞魏に戻っても両方の人格の体が悪化していた。

「大丈夫？雨眞魏？」

「うん…大丈夫だよ…劉禰ちゃ…ゲホッゲホッ！」

「あんまり、無理しないでね。」

「うん…。」

深紅が居なくなってから、姉、深香にも変化が出てきた。

この一週間、目から血の涙を流していた。

「白、大丈夫か？代わるぜ。」

「僕は、大丈夫。」

「そうか？」

「うん。」

「…。」

梓と白は黒の看病をしていた。

「皆、冷たい空気なの。」

「それもそうだろう。」

「そうよね？」

階段で乃亜と蒼弥と緋那が話していた。

「どうなるのかしらね。この学園。」

「本当だな、この学園はとても不思議な事が起きすぎだと思っぞ。」

「それもそうなの！」

「はあ…。」

「…。」

「笑えないの…。」

三人は階段でとても暗い顔をしていた。

「まただよ。」

「えっ?」

「本当なの。」

「深紅の姉が血の涙を流している。」

深香は目から血の涙を流していた。

「ゲホツ…ゲホツ…ゲホツ!」

「雨眞魏!」

「大丈夫なのか?」

「あつ…うん。」

雨眞魏はよろよろ深香の前に立った。

そして深香の手を握った。

「大丈夫…だよ。深紅ちゃんは生きてるよ。お姉ちゃんが信じないと、駄目だよ」「ニコツ

「!?!」

初めて感情を表に出した、深香。

「大丈夫…夫…あなたが…深…紅ちゃん…んを信じれば…大丈夫…夫。」  
「バタンッ!」

雨眞魏が倒れた。

「雨眞魏!」

「大丈夫か?」

「大丈夫よ、ただ気を失っただけよ。」

「よかつたの」

「ん?」

眠っている雨眞魏の目から涙が零れ落ちていた。

「雨眞魏…」

「部屋まで運んでくる。」

「よろしくね、蒼弥」「ニコツ

「…。」

蒼弥は雨眞魏をお姫抱っこして部屋につれて行った。

ビリッ…。

ハッ!?

雨眞魏は目を覚ました。

「雨眞魏？大丈夫か？」

「蒼弥君…うん。大丈夫だよ。」

蒼弥は雨眞魏を下ろした。

「…結果が…。」

「えっ？」

ドカーンッ!

学園の入り口から煙がいつぱい入ってきた。

「キヤア!」

「なんなの??」

「へえ〜、中つて結構豪華なんだあ〜」

「…。」

「ああ〜!雨眞魏〜!超〜可愛い!」ニコッ

「!?!?。」

「咲く、自分の目的は果たしてね」ニコッ

「分かっています。」

「ああー、自己紹介するね」ニコッ

タッ!

「お前!?!?。」

「あれ?白君もいるんだあ〜」

カチャッ

「あれ?…まだ、自己紹介してないんだけどなあ〜」

「うつせな、お前ら何しに来た。」

少女の後ろにいる黒鳥、頭に銃をあてている。

「ええ〜?何しに来たって?それは呪マークの者を捕まえに来たん

だよお〜」ニコッ

「…。」

「まあ、黒鳥は要らないけど。あなたは模造品じゃない、処分品なんだよ。」

「!?!?…死ね!」

バキューンッ!

「今、心に空気が出来た。」

「!?!?…。」

少女は銃の弾を軽々しくよけていた。

「チッ!」

「咲く。」

「御意。」

「白!雨真魏!逃げろ!」

「ゲホッ!ゲホッ!ゲホッ!…!?!?」

ドンッ

雨真魏を気絶させた。

そして、抱える。

「おい!雨真魏!」

「チッ!」

「別に、雨真魏が揃えば、もういらなんだけど、一応、白君もね

え〜」ニッコッ

カシャーンッ!

「!?!?…なっ!」

黒鳥は鳥の檻に閉じ込められた。

「鴉にはお似合いですよう?」ニッコッ

わしも本来の力が戻れば…!。

「白!逃げろ!」

「!?!?…。」

「白様、行きますよ。」



「おい！雨真魏と白を返せ！」

梓が下に下りてきた。

「あれ？あぁ〜そうか。じゃあ勝負しようよ。」ニコッ

「勝負？」

「そう、君の故郷で勝負。」

「!?!?。」

「君の故郷で君と白君と黒君と雨真魏が出会ったあの、研究所。」

「?!?!?。」

「僕はそこで待ってるよ。」

「あつ！待て！」

岬と咲くは白と雨真魏と共に消えた。

出会いの研究所で勝負…。

### 31話 襲撃 後編

「やっとだよ。模造品が揃った。」

「うう…クツ…。」

「あれ？もう目を覚ましたの？志木〜」ニコッ

「うっせ…。」

瞬慧と深紅と白は三人、小さな檻に入れられていた。

「深紅…白！」

「うう…。」

「…。」

深紅と白はまだ気を失っていた。

「志木、さあ〜、僕と一緒に帰ろう。」

「?!?…。」

「雨眞魏も連れて、白君も深紅も一緒に帰ろう?」「ニコッ

「?!?…嫌だ！俺は帰らない！あんな所に！」

「そっか、知ってる?。」

「何がだ!…。」

「雨眞魏、梓君、黒君、白君を出会させたのは、僕なんだよ。」

「?!?…。」

「一人一人がもう離れなれなくなる、そして離れていく屈辱をして欲しかったのさ！」

「?!?…。」

岬はとても憎い目をしていた。

「俺は…恨んでいるんだな。」

「当たり前だよ！僕を惨めに惨めにした君を!…だけど、僕は志木が大好きなんだあ〜」ニコッ

「チツ…ウザイ。」

「だけど、志木も雨眞魏も僕がいないとその、病治やまいらないよ?。」

「!?!?。」

「雨真魏は僕の事、覚えてなかった。」

「!?!?。」

「あれ、どういう意味？僕の事を一番恨んでいるの雨真魏だよ？」

「…あいつに…何も教えないでくれ…。」

「どうして？」

瞬慧はとても悲しい声で頼んでいた。

「…雨真魏は…記憶喪失…一部の記憶は無い！だから…悲しい過去を教えないでくれ！」

「そんなの、しないよ。」

「!?!?。」

「僕は雨真魏に思い出して欲しいんだもん。だからさ！」

「?!?!? お前は…。」

「僕はさ、あんたら極普通の化け物とは違う！」

「…。」

「僕は…人間！僕の体は人間だよ！だから、刺されたらすぐ死ぬ。だけど…。」

それが出来ない…歪の悪魔がとりついてるから。」

「?!?!? 岬お前！」

岬は何かをしようとしていた。

「人は…何か無しでは生きれない。」

「!?!?。」

「志木、サヨナラ」

「!?!?」。

フラッ

駄目だ…目がかすんで…。

バタンッ

瞬慧は倒れた。

俺には…まだやる事が…。

「もう、時間。だけど、楽しかったよ。咲く。」

「御意。」

「志木は、闇の住人?<sup>ナイトメア</sup>」

白君は、闇の住人?。

深紅は、闇の住人?なんだよねえ〜」ニッコッ

### 32話 死と隣り合わせ

【雨直魏、大丈夫だよ。お前は俺が守る。】

誰?…誰なの?…なんで、私の名前を知っているの?…。

【知ってるよ。雨直魏の事なら。何でも。】

何でも…私の事なら…じゃあ…。

【何?】

私は…何者なの?…。

【君は、ヴァンパイアと死神の血を引く娘。】

それは…知ってるよ。自分自身が分からない。

【…。】

ねえ、何で…。

【君は恨み、憎しみがあると死ぬ。】

!?…私が!だって私は…。

【君はいつも死と隣り合わせなんだよ。】

「!?!?。」

雨真魏の人格で目を覚ます。  
目を覚ますとベッドの上だった。

「…?。」

「起きたあゝ」「ニコッ

「誰?。」

「僕だよおー岬」「ニコッ

「岬ちゃん?。」

「そうそう」「ニコッ

「…?。」

何か…この人を見ていると懐かしい…だけどもとても悲しい…。

「どうかしたの?」

「皆は?。」

「あゝ後で来るよ」「ニコッ

「そうなんだ。」

「雨真魏は、待っててね」「ニコッ

「うん。」

雨真魏はそう言って、机の上においている「キーキー」を口にした。

「じゃあ、また後で来るね」「ニコッ

「うん。ありがとう岬ちゃん」「ニコッ

「うづん」「ニコッ

岬は部屋から出て行った。

「本当に記憶が無いんだね。面白くなってきたよ。また、あの顔が見れるんだあゝ」「ニコッ

「ゲホツ！ゲホツ！ゲホツ……。」「  
雨真魏はとても悲しい顔をしていた。

死と隣り合わせ…嫌…死にたくない。何…なんで私は死ぬの？…。

雨真魏の頭はそればかり廻っていた。

「…ゲホツ！ゲホツ！…。」

【雨真魏！】

「！？…瞬替！」

【逃げる！】

「どうして？」

【いいから！】

「分かったよ！」

雨真魏は部屋の窓を開ける。

「あれ？何してるの？」

「！？…岬ちゃん…。」

「雨真魏、ここからは出ちゃ駄目だよぉ」ニッコッ

「…………。」

「真実を教えてあげる。」

「えっ？…。」

「あなたの思い出。」

「私の思い出は全て私が覚えてるよ！」

「覚えてない、あなたの記憶はかけてるの。パズルのように。」

「！？…。」

岬は雨真魏を追い詰めるように言う。

「…………。」

「思い出してよ！雨真魏！僕と君は友達？だろう？」

「？！…違う…私と岬ちゃんは今日、初めて会ったよ…。」

「初めて？…ねえ。」

「!?!?。」

雨真魏の頭の中で何かが引つかかった。

「初めて?…違う…初めてじゃない…あなたとは…。」

「そう。会ってるよ。」

「!?!?…違う!…違う!…」

雨真魏は目をつぶって、頭を抱えて座り込む。

「雨真魏、私達いつも一緒だよね?」

「?!?!?……。」

雨真魏は顔をあげた。

「雨真魏」ニコツ

「岬ちゃん!…嫌!嫌!」

「思い出した?君は僕の模造品。だから、意地悪したかったんだあ  
」

「!?!?…返してよ…私の…私の。」

「だって、雨真魏、とても幸せそうな顔してたんだもん。」

あの顔を壊したかったんだあ…僕の模造品だからさ!」ニコツ

「!?!?…返してよ…私の大切な人を!……。」

「何言ってるんだよ?あれ、殺したの、雨真魏自身だよあ」ニコツ

「違う!違う!」

雨真魏は頭を抱えんだ。

「咲く、運べ。」

「御意。」

咲くは雨真魏を気絶させて抱えた。

「はあ、実験スターとだね」ニコツ

### 33話 月下の満月

「雨眞魏が鍵。雨眞魏が宝。雨眞魏が世界の全て。」  
「……。」

雨眞魏は気を失って、ベッドの上で眠っていた。  
目を覚ます事もなかった。

まるで、永遠に眠るかのように、眠っていた。

「始める。深紅ちゃんも白君も咲くに任せるよ。」

「御意。」

咲くは消えた。

「じゃあ、雨眞魏。サヨナラ。」ニコッ

「……。」

「白様、もう終わりです。」

「!?…僕は、お前には負けない!」

「もう、逃げるのをやめてください。」

「!?…。」

「世界も誰もあなたの味方はいません。」

「う…黒…。」

バタンッ

「!?…白?…。」

「黒!早く行くぞ!」

「あっおう。」

「深紅…君はもう用済みです。」

「!?!?…嫌…こないで!…姉様…。」

「姉様!?!…私は…。」

「サヨナラです。」

「カキンッ!?!?!?!?!」

「!?!?…何!」

「お前ら、やりすぎなんだよ!」

「志木!?!?どうしてだ!」

「俺は、雨真魏と違って、瞬慧って名前があるんだよ!」

「?!?!」

意味がまったく伝わっていないらしい。

「俺の瞬は、一瞬の瞬だ! 慧は慧星の慧だ! よく、覚えておけボケが!」

「あなたは、ここに来ると思いましたよ。」

「ああ?」

「死んでください。」

「グサツグサツグサツ!」

「?!?!。」

瞬慧は体の何ヶ所を横から刺された。

「!?!?…う…ゲホッ…。」

瞬慧は体から血を大量に流す。

「バタンッ!」

「瞬慧さん!」

「深紅…逃げる…。」

「だけど…。」

「いいから…白を連れて…逃げる…俺は…平気だ。」

「…分かりました!」

深紅は、人形バセットを使って、白を担いで部屋から出る。

「逃がしましたか。」

「…お前は俺が…倒す。」

「無理です。」

「…梓…悪いな。」

「?!…雨真魏?…瞬慧?」

「俺…もう駄目かも知れないな。」

「死ね!」

「悪い…サヨナラ。」

グサツ!

バタンツ

瞬慧は倒れた。

そして血が大量に出ていた。

そして、部屋から満月の月光が射し込んでいた。

その満月の光が瞬慧の体に当たっていた。

「来た。」

「……。」

「志木、あんたのサヨナラだよ!咲く、二人を追え!」

「御意。」

「サヨナラ、雨真魏!志木!。」

「!?!?。」

瞬慧は少しだけ、意識が合った。

「ガツ!…う…岬!…貴…様。」

瞬慧の周りには、雷が流れ込んでいる。



34話 君の笑顔（前書き）

更新遅れてすみません。  
これから、よろしくです。

### 34話 君の笑顔

「ねえ、知ってる？雨真魏も瞬慧も世界のために死を選んだ。」

「雨真魏！」

梓は瞬慧の所に駆け寄る。

「……………」

雨真魏の髪は真っ赤な髪に染まってきていた。

「!?!?…」

梓は思わず驚く。

「これが、本心本能の姿。」

「!?!?…」

「誰も知らない。雨真魏の姿だ。」

「……………」

「雨真魏の人格は生き、志木の人格は死んだ！」ニヤッ

「!?!?…」

「傑作だ！僕は勝った！傑作だよ！深紅も白ももう死ぬかもしれな

いよ？」「ニコッ

「!?!?…」

岬は満足気な顔で微笑んでいた。

……………。

いきたくないか？

誰?…。

お前は生きなくてはならない。雨真魏。俺の分まで生きてくれ。

瞬慧…うっん。一緒に生きるんだよ。これかも。

雨真魏…ありがとう…。

瞬慧…。

「お前は、許さない！」

「あれ？怒った？」

「お前だけは許さない！！！」

梓の能力が解かれる

「梓！」

「劉禰、今行けば、梓に巻き込まれる。ここは梓に任せて

俺達は白と深紅を助けに行くぞ。」

「分かった。」

劉禰達は、白と深紅達がいる、部屋に向かった。

ビリッビリッ

梓から電気が走っていた。

「へえ〜、狼つて結構いいものだね。」

「…。」

「僕、ペット欲しかったんだよねえ〜」「ニッコッ

「狼と天使の血を引く者だけど、まるで悪魔と狼の血を引いているものだな。」

「…。」

梓は一瞬にして消えた。

「あれ？消えた？…なんてね。」

カキンッ！

「?!…。」

「君では、僕には勝てないよ。」

「うるせえ！！！！！！！！」

「そつちがうるさいよ。」

「ガッ！ドカーンッ！！！！！！」

梓は岬に思いつきり腹を蹴られて、壁まで飛ばされた。

「はあ…こりゃ、しつけしないと。駄目だなあ」

「…。」

「だからさ、もうやめない？僕、戦うの嫌いなんだけどさあ？」

カキンッ！

「俺は…お前を殺す！」

「殺せるものなら…殺してよ！」

グサッ！

「！？…ガハッ！」

梓は腹を思いつきり刺されて、座り込む。

「僕だって、死にたいよ。だけど死ねないんだよ！もう疲れた！僕だって！」

人生に飽き飽きなんだよ！！！！！！」

梓の体を切り刻んでいく。

梓の体は血だらけだった。大量の血が流れていた。

「…ハア…ハア…。」

岬はとても息が荒くなっていた。

「雨真魏も志木も、呪マークのせいで寿命がきつたんだよ。」

「雨真魏も瞬慧もまだ死なない！俺が一生守ると決めた相手だ！」

「！？…愛されてるね…雨真魏も志木も…。」

岬は笑ってる半分に寂しそうな顔をした。

「梓だっけ？…君は、本当に守れると思う？」

「はあ？…。」

「じゃあさ、賭けをしようよ！」

「…なんだ…と？」

「雨真魏達を守れなかったら僕の勝ち。守れたら梓の勝ちね。」

「…チツ…」

ヤバイ…視界がかすんできてる…。

「今日は、もう終わりだよ。咲く、帰るよ。」  
そう言つて、岬は消えた。

バタンツ

「雨真魏……ごめんな…。」  
梓も気を失ってしまった。

そして、一週間後

ガタンツ!

「梓!おはよう」ニコッ

「おう、雨真魏。おはよう」ニコッ

あれから、一週間が経った。

梓の怪我も雨真魏の怪我も無事回復した。

そして、今を平凡に生きている。

雨真魏の髪は灰色から、真つ赤な赤毛に染まった。

「しっかし、真つ赤だねえ」

「それでも雨真魏い〜」ニコッ

白は雨真魏に抱きつく。

「そうだな。雨真魏らしい色だな。」

「ちよっ!梓、雨真魏らしい色って何?」

「別に。」

「ちよっと!梓!教えてよお〜!」

君の笑顔が薔薇のように綺麗だから…。

雨真魏は知らないけどな…。

「黒発見　　！久々だな。あいつに会うのは。」

34話 君の笑顔（後書き）

次回からは、新章編です！

35話 漆黒の嘘と漆黒の真（前書き）

新章編開幕！

### 35話 漆黒の嘘と漆黒の真

『黒、私を守ってくれる？』

『おう！絶対守るって！』

『なら、約束。』

『おう！約束な。絶対守ってやるから。』

あの後…俺は…約束を破って死なせてしまった。

「黒！おはよー！」「ニコッ

「おう。白、おはよー。」

「どうしたの？顔色悪いよ？」

「そんな事ない。俺はいつでもこんな顔だ。」

「そっか」「ニコッ

俺の双子の弟。血は繋がってないけど。俺の弟だ。

絶対こいつだけは、失いたくないと思った…理由が合ったからな。

「はあ…。」

「黒？どうかしたの？」

雨真魏が黒に話しかける。

「皆、聞くな。別になんでもないけど？」

「そっ？それならいいの」「ニコッ

雨真魏は優しく微笑んだ。

「甘いんだよ！お前！」

ダンッ！

「瞬慧！？」

瞬慧の人格に変身した。

そして、瞬慧は机を強く叩いた。

「男なら、飯は5杯は行け！」

「…何の話してんだよ。お前。」

「何！黒！お前、少し生意気になったぞ！」

「俺は、いつもこんなんだ。」

「ムカツク！！！！」

いつもより、なぜか騒がしかった。

人数が増えたからか？…。

「黒鳥、お前起きるの遅い。」

「悪いっす！梓先輩」ニコッ

「はあ…。」

梓はため息を吹いた。

「お前、もう”梓先輩”って呼ぶな！」

「何でっすか!？」

「俺は、別にお前の先輩じゃねえーし。」

「分かった！じゃあ梓ー」ニコッ

「それでいい。」

梓は納得。黒鳥は嬉しく微笑んでいた。

俺は…皆が明るくて、明るいほど…いやになる。

冷めて来る。鬱陶しくなる。何もかも壊したくなる。

「悪い、外の空気吸ってくるわ。」

黒はそう言っつて、外に出て行った。

「ん？…深紅？」

学園の屋上に来た、黒。

上から深紅の姿が見えた。

「姉様!…。」

深紅は姉の事を呼んで叫んでいた。



深紅の目の前には仮面をかぶった男が居た。

「姉様!...。」

「久しぶりだな。深紅。ほら、母さんにも挨拶しなさい。」

「!?!?...母様!...。」

男の横から深香と同じ人型ロボットが出てきた。

「深香も元気か。そうか。」

「違う!嫌!やめろ!やめろ!やめろ!」

「深紅、どうした?父親に会えて嬉しいか?」

「貴様などに会えて嬉しくなんかない!」

バチンッ!

「?!...。」

「口の聞き方をわきまえろと言っているだろう!」

深紅の父を名乗る男が深紅の頬を叩いた。

「...何しに来たんですか?...。」

「いや、深香を連れ戻しに来た。後深紅、お前もだ。」

「!?!?...嫌だ!...。」

深紅はとても悲しい目をしていた。

「おいで、深紅。」

「!?!?...母様!...。」

バタンッ

深紅はそのまま倒れてしまった。

「ほらね、深紅ちゃんも一緒に行くの。黒も一緒に行こう」「ニッコシ  
凜という少女は黒に手を差し伸べた。

「!?!?...俺は!...。」

「黒、私とずっと一緒に居てくれるよね?」

「…!?!?」

白…。

黒の頭の中に浮かんだのは笑っている白だった。

ガタンッ!

「黒!」

「白!」

「…行こう、黒」

「…悪い!白!」

「?!…黒!」

黒は雫と消えてしまった。

「黒!黒!…!…!…!…!…!…!…!…!」

36話 真紅の薔薇 前編(前書き)

深紅編から、始めます。WW(過去編)

### 36話 真紅の薔薇 前編

私は、姉様が…世界で一人しか居ない…姉様が大好きだった…。  
いつも、私を笑わせてくれる。姉。  
とても大好きだった。私の大切な人だった…。

世界で一番もつとも、私が信頼できる相手だった…。

「姉様！」ニッコツ

「深紅、今日も元気だね。」ニッコツ

「姉様！おそぼう！おそぼう！」ニッコツ

「そうね。遊びましょう。」

「うん！」ニッコツ

いつも二人で笑い合っていた。

いつも二人で花畑に行って、遊んでいた。

ただ、ただ、その日々が楽しかった。

「姉様、どこ？姉様？」

そして、ある日。

不幸で絶望する日が来た。

私はまだ、知らなかった。

私はただ築きもしなかった。

「姉様！どこ？姉様？」

私は探した。姉様を。必死に。不安と願いで頭がいっぱいだった。

ガタンツ！

「姉様？」

一つの扉を開けた。

真っ暗な部屋だった。

そして、いやなにおいがしみていた。

「おお？深紅か？どうしたんだ？寝ないのか？」

「父様：なんでここに？何をしているのですか？」

「深紅、見てなさい。お前の姉と母が命を欠けて、この私の実験に参加してくれた。」

「!?!?。」

父の目の前の台には深香が眠っていた。

「姉様！」

「深紅、静かにしなさい。これから実験なのだから。」

「いや！姉様!?!?。」

タツ！

深紅は深香の所に来る。

「深紅！来るな！」

バシツ！

深紅は頬を叩かれる。

「駄目！」

「深紅！やめなさい！」

深紅は父の手をつかんだ。

「姉様！いや！やめて!?!?!?!?!」

「うるさい！もう、深紅を殺しなさい。」



そして一瞬。

「深紅…父様を消して、恨まないでください。」

「母様…。」

そして、人型ロボット《はは》は倒れた。

「殺す…。」

「やめる…深紅！やめてくれ！」

「うるさい…お前は私が殺す！」

そして、深紅は父の左目を刺した。

父の左目からは大量の血が溢れ流れていた。

グサツ！！

「！？…。」

深紅の肩に刃物が刺された。

「はははは、深紅！お前は負けた！」

そして母は立ち、父を担いで、どこかに消えて行った。

「…姉様…。」

バタンツ！

深紅はそのまま姉の隣で倒れて、眠ってしまった。

パチツ

「……姉様…。」

「深紅。」

「！貴様！」

深紅の目の前には父の姿が。

「おいおい、まだ。お前を処刑するのにはまだ早い。」

「私が、貴様を処刑してやる！」

「出来るか？そんなガラクタのお前に。」

「許さない！お前だけは！」

### 37話 真紅の薔薇 後編

私の大好きだった…姉様…。

もう居ないの？…あんなに笑顔で笑っていた…深香姉さんは…もう。

「お前だけは許さない！」

「深紅、お前に出来るのか？」

カキンッ！

「母様…。」

「…。」

「邪魔をしないでください！」

深紅は母を吹き飛ばした。

「深紅。お前は哀れだ。」

「貴様を殺して、私は姉様を人間に戻す！」

「それは無理だ。あれはもう戻れない。」

「戻す！絶対戻る！」

「そうか。ならやってみるがいい。」

「貴様を殺して、なつてやる！」

グサッ！！！！

「!?!?。」

「お前は負けたんだ。深紅。」

「貴様…。」

「私も、もう人型のロボットだ。」

「!?!?。」

深紅が刃物で刺された。

バタンッ！

深紅は倒れた。

「…私の…家族は…皆…ロボット?…。」

「そうだ。お前だけが唯一のヴァンパイアの血を引く娘だ。」

「!?!?…。」

深紅はとても悲しい顔をした。

「深紅、もう疲れただろう?もう、帰ってきなさい。」

「私は…帰らない。」

「そうか。それは残念だ。」

グサツ!グサツ!

「!?!?…。」

深紅の背中を刃物が2発突き刺す。

深紅はそのまま、顔をあげはしなかった。

「お前は、ヴァンパイアだ。」

姉様…姉…。

ハッ!

「…ん?」

深紅は血だらけの体で立ち上がった。

「…。。。」

そして、深紅の髪が漆黒髪に真紅のような瞳に輝いた。

「…。。。」

深紅は背中から、刃を出した。

「これがヴァンパイアの落とした、娘。」

「…。。。」

「これが、ヴァンパイアの子の本心。」

「…。。。」

「!?!?。」

一瞬にして、父の前から深紅の姿が無くなった。  
カキンッ!

「!?!?。」

一瞬にして、深紅は父の目の前に現れた。

母が父の前に立ち、深紅の刃と重なっている。

「…邪魔だ。どけ。」

深紅は母を吹き飛ばした。

「!?!?…お前何をしてるか!分かってているのか!」

「……………うるさい。」

深紅は父を躊躇なく刺した。

「!?!?。」

バタンッ

父はよろよろと倒れた。

「……………」

深紅は母を元に向かった。

「待て…深紅…母さんだけは…殺さないで…くれ。」

「……………」

深紅は父の話を見殺しして、母に刃を振ろうとする。

「やめろ!深紅!」

ポタンッ

深紅の様子がおかしかった。

「!?!?。」

深紅は刃を落とした。

「……………なぜ?。」

深紅の目からは一粒一粒の涙が溢れていた。

「殺せない…私には…家族を…。」

グサッ!

「グアツ！」

「父様！」

深紅が振り向くと、一人の少年が父を刃で刺していた。

「君じゃ、王にはなれない。」

「…父様！貴様！何をする！」

「ヴァンパイアはいいな。」

「?…。」

グサツ！

「!?!?。」

一瞬にして、少年が深紅の目の前に来て、深紅を刺した。  
バタンツ！

「君、結構良い匂いがする。君が王になればいい。」  
少年は消えた。

姉様…もう会えない?…寂しいな…姉様…。

『深紅…。』

「…姉様…。」

『大丈夫だよ。姉さんはここにいるよ』ニッコ

「深香姉さん…。」

深紅はとても優しい顔で眠った。

38話 闇無限 黒編Ⅱ前編

そくだ…あいつと出会ったのは…夏の朝。

太陽がまぶしすぎて、目がまともに開けられなかった日。

そして、あいつに出会った…。

” 雫 ” という少女に

。

雫は、森から出てきた。白いワンピースに身を包んで、ドロだらけで俺の前に。

あいつは、笑っていた。

俺と出会ったときも、笑っていた。

向日葵のような微笑むで…。

「黒君、何で私のためにこんな夜でも来てくれるの？」

「別に…お前、いつもここに居ると思ったから。」

「いるよ。いつまでも。」

「???。」

雫と黒は川の側で座っていた。

「雫、俺の家で住まないか？」

「うっん。黒君の迷惑にはなりたくないの。だからいい。」

「そうか？お前、何かどんどんドロだらけになってる。」

「ああ…気にしないで、ちょっと遊んでるだけよ」「ニッコッ

「そうなのか？ならいいけど。」

「ほら、黒君。もう帰らないといけないんじゃない？」

トシッ

雫は黒の背中をポンッと押した。

「!?!?…。」

黒には一瞬、寒気が漂った。

なんだ今の?…。気持ち悪い…。

「じゃあね!黒君」ニッコツ

「おう!…。」

雫は優しい笑顔で黒に手を振った。  
そのまま黒は、走って家に帰った。

俺は、予感がした

。

「じゃあ、母さん行ってくる。」

「ちよつと待ちなさい。黒!」

「ん?何?」

「今、ちよつと奇妙な事件が勃発してるらしいのよ。」

「事件?…。」

「そう、周りの村、全ての村人が心臓だけを取りぬかれて死んで  
いるって事件よ。」

「!?!?…。」

黒は少し分かっていただけだと半分恐怖心が合った。

「気をつけてね。」

「分かってるって!」ニッコツ

「そう。ならいいわ。明日から双子になる弟が来るのよ。楽しみに  
していてね」ニッコツ

「おう!弟か、楽しみだ!」ニッコツ

黒は家を出た。

「…。」

「ん？黒君？どうかしたの？」

雫は焼き魚を食べていた。

「あつ…悪い、飯だったか？」

「ううん。大丈夫だよ」ニコッ

「そうか？、なあお前やつぱり俺の家に来い！」

「どうして？」

「今、奇妙な事件が勃発してるんだ！時期ここにもそいつが来る！」

「大丈夫だよ。」

「えっ？」

雫は焼き魚を捨てて、立ち上がった。

なんだ？…雫がいつもと…違う！

「その事件やったの私だよ。」

「?!?…。」

「心臓取ったら、死ぬかかって思ってたら。あの恐怖心に沸いた顔がたまなくなつてさ！

殺しているうちにその恐怖心の顔が見たくなるんだ！

ああ！黒君にも見せてやりたいなあ〜だけど、ここで死ぬから。

いつか。」

「?!?…。」

「死んでくれる？」

「俺は…。」

雫は血だらけの刃物を手に持っていた。

「?!?…。」

俺は…生きる！弟の顔を見て、弟を守るって…。

「黒君…私を守ってくれるよね？」

「?!…。」

「ごめんね、黒君。」ニコッ  
雫は目から涙を流していた。

「雫!…。」

グサツ!グサツ!ググサツ!

「…失せる。」

雫の体が剣が何本も刺さっていた。  
バタンツ!

雫の体からは血が流れていた。

「……チツ。」

一瞬黒には黒い羽が生えていた。

「……。」

雫はそのまま死んでしまった。

黒はそうして、白に出会った。

38話 闇無限 黒編Ⅱ前編(後書き)

ぐろくていめんなさいく!

39話 闇無限 黒編Ⅱ中編

ジャリッ…。

「ん?!?!?!?!」

黒は目を覚ました。

手には鎖が繋がっていた。

「起きた?」

「?!?!?!?!?!」

「黒君、久々だね。こんなにかっこよくなって」「ニコッ

…。」

「あっ!鎖、外すよ!ごめんね!忘れてたの。」「

雫は慌てて、黒に繋いでいる鎖を外した。

「お前、何が目的だ?」

「目的??!」

「何、考えている!」

「私は、ただ。黒君と一緒に居ただけだよ」「ニコッ

「?!?!?!?!」

違う…こいつは…あの日の雫…。

「黒君?」

「…お前、俺を殺せるか?」

「えっ?そんなの無理だよ!何で、私が黒君を?」

「嫌…言ってみただけだ。」「

「…殺せる。」「

「!?!?!?!?!」

「だってさ、ずっと黒君を殺したかったんだよ?」

「…雫…。」

「この日を待っていた！いつも待っていたんだ！はははははは！」  
「?!?。」

雫は落ちていた、刃物を手に取った。

「?!?。」

「黒君…死んでくれる?」

「?!…雫!」

俺はまた…大切な人を…殺すのか?…。

「黒君は、また私を殺すの?」

「?!?。」

「ははは…無理だよな?無理に決まってる。あんたの弟すっごくウザイよ?」

「白は関係ないだろう!」

「いやあゝ。黒君が私を殺した後。君にそっくりな男の子が来たんだよねゝ」

「?!?。」

何で白が!?!?。

「あの子は、血だらけで一生、神にも天使にも魅入られない存在だよ。」

「!?!?…白はそんなんじゃない!」

「あの子、私にこういったの…。」

【兄上に次、近づいたら。君殺すから。】

「白はそんな事言わない！」

「言ったんでしょう？あれは、もう絶望の顔！だけど瞳はとても寂しい顔！」

あの顔たまらない！もう1回みたいな。」

バキューンッ！

「?!…。」

「来たね。」

「白！」

白は黒と雫の家部屋のドアの前に居た。

「あれれ？兄が名前呼んでるのに、返事もなし？」

「君、昔言ったよね？兄上に近づいたら殺すって？」

「白!…。」

何で…あいつが雫を殺すんだ?…。

「知らないよ。だって私は黒君より君に会いたかったんだもん」ニ

コッ

「!?!…白に？」

黒は顔を上げた。

「僕に会いたかったんだ。僕は会いたくなかった。」

バンッ!

「?!…。」

「雫！」

バタンッ!

白は躊躇なく、雫を撃った。

雫は倒れた。

「…………。」

白は倒れている雫に銃を向ける。



40話 闇無限 黒編II後編

「黒！大丈夫??」  
いつもの白だった。

「白。。」

雫は血を大量に流して、そのまま動かなかった。

「…」ニコッ

ポタンッ

「黒??どうしたの!??」

白は黒の顔を見て、焦った。

黒の目からは涙が溢れていた。

「…黒??」

「…悪い…。」グズッ

白は優しい…だから俺は…。

「う…ごめんな…白。」

俺は、それにすがってるだけなんだよな?…。

雫…ごめんな…。

「ごめんな…白。。」

黒は泣いていた。

白の目の前で。

たった一人の弟の目の前で。

「黒」ニコッ

「!?!?。」

一瞬黒には、白と誰かの顔が重なった。

「雨眞魏。。。」「ボソッ

黒は白の頬に触れる。

「黒?。」

「会いたい。。。雨眞魏。。。」  
ボタンッ

黒は気を失ってしまった。

「黒。。。」

白は黒の頭を優しく撫でた。

「白!黒!飯だぞ!」

梓が呼んでいた。

「白!行くぞ!」

「うん!」

黒と白は手を繋いだ。

「あっ、白、黒!おはよう」「ニコッ

目の前には雨眞魏が居た。

「雨つ眞魏　　!?!?!?!」

白は相変わらず、雨眞魏に抱きついた。

「黒、どうかしたの?」

雨眞魏が黒に問う。

「別に…なんでもない。」

「そっか」「ニコッ

ドキッ!

「?!…。」

黒は頬を赤く染めた。

「恋だな。」

「そうね。」「ニヤリッ

「……。」

「恋なのね。」

「恋なの??」

「お前ら!後ろからつつせ!」

別に…恋も悪くない…。

41話 鬼の血を引く者(前書き)

今回は緋那がメインです

## 41話 鬼の血を引く者

私は、人間が好きじゃない。

…私は、自分が憎い。  
だつて…。

”鬼”の血を引く者だから

「…はあ…つまんないわ。何もかも。」

ベッドに寝転んでいる少女、緋那。

あまり、他人にも物にも興味をあまり示さない。

ガチャツ

「はあ…ん？」

「…何、してる？」

「凜。久しぶりじゃない？」

「…徹夜続きで寝てたな。」

「へえ。」

緋那の目の前には凜が居た。

「あれ？凜ちゃんに、緋那ちゃん？」

「雨真魏。どうかしたのかしら？」

「ううん、何でも無いよ。ただ呼んでみたかっただけだよ」「ニコッ

「それ、洗濯物??」

「えっ?…うん。」

雨真魏は学園のみんなの洗濯物が入った巨大なかごを持っていた。

「…手伝い。」

「ありがとう、凜ちゃん」「ニコッ

「しよいが無いわ。手伝うわ。」「ニコッ

「ありがとう。」「ニコッ

三人は屋上に行った。  
ガタンッ

「あれ？梓？」

屋上では、梓が寝ていた。

「ZZZZ」

「可愛い寝顔だね」ニッコッ

「そうね。こんな顔だから、いじめちゃくなるわ。」ニヤリッ

「分かったから、早く洗濯物干すぞ。」

「あっうん」ニッコッ

「そうね。」

三人は洗濯物を干し始めた。

太陽の日差しが差し込んでくる。

「まぶしい……。」

緋那は座り込んだ。

「……闇の……空……光の……太陽……。」

小さな声で歌を歌い始めた。

「緋那ちゃん??」

ハッ!

「?!……何かしら??」

「大丈夫?影で休んでもいいよ」ニッコッ

「そう?分かったわ。」

緋那は日陰に座り込んだ。

人間とよく似た、化け物……皆変わらないのになあ……。

緋那は少し寂しそうな顔をした。

バタッ！

「???。」

緋那が顔を上げると、雨眞魏が座り込んでいた。

「雨眞魏！大丈夫？」

「ハア…緋那ちゃん?…ははは…大丈夫だよ」「ニコッ

「全然、大丈夫じゃないでしょう?」

「はははは…。」

バタンッ

雨眞魏は倒れてしまった。

「軽い、熱中症だな。まあ、この頃太陽が出てきたからな。」

「そうね。」

パチッ

「…?緋那ちゃん?…。」

「もう、雨眞魏は無理しすぎなんだから。」

「ごめんね…」「ニコッ

「もう、寝ろ。雨眞魏。」

黒鳥が横から言う。

「うん…。」

雨眞魏はすぐ、眠りに付いた。

人は単純。だから、化け物も単純なのかもしれない…。

緋那は自分の部屋のベッドに寝転んだ。

「ははは…やっぱり…私は、自分嫌いね。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9389v/>

---

化け物学園帝国

2011年10月12日16時49分発行